

聖徒の道

10
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年10月号



表紙——フィンランドで福音の祝福を享受する4,000人以上の聖徒のひとり、サリア・カルフネン姉妹。(本誌「この歌を聞いてください」pp. 8-12参照。写真撮影リチャード・M・ロムニー)

こどものページ表紙——サンディー・ゲーゴン画。

一般

- 大管長会メッセージ——感謝を神に捧げん
第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー 2
- スオミ——フィンランド バルト海の灯台
ジャイルズ・H・フローレンス Jr. 12
- 献身の力 M・ラッセル・バラード長老 20
- 私の人生を変えた書物 ラリーン・ガント 26
- ファン・クンオク 韓国の子供たちを愛し続けて
シャーリーン・ミーク・サンダース 32
- 理解の目を開いて グワダルーペ・オンティベロス・オーティス 48

青少年

- この歌を聞いてください リチャード・M・ロムニー 8
- ジョー・フォルカット長老 イギリスで分かち合った福音の光
アン・C・ブラッドショー 42

定期特別記事

- 読者からの便り 1
- 家庭訪問メッセージ——慈善奉仕の実を共に味わう 25

こども

- モルモン経物語——アムリサイ人 2
- 円の中に ナンシー・ハーディング・グローブズ 4
- 君にもできる ガイ・フィッツジェラルド 6
- おもちゃばこ 9
- 分かち合いの時間 しんせいな場しょではけいけんに
バージニア・ピアス 10
- アンディとかさ ジョイス・ピース 12
- けいけんさとは L・トム・ペリー長老 16

聖徒の道

1992年10月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジエームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・テイディエ、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー

教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：フライアン・K・ケリー

編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集補佐/こどものページ：ティエーン・ウオーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ

アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン

デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

工程管理：ダイアナ・ハンスタブレ

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1992年10月号第36巻第10号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

株式会社 精興社/クロスロード

年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号350円

International Magazine October

1992 ITEM 92990 300

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1992 by The Church of

Jesus Christ of Latter-day Saints. All

rights reserved. Translated into

Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙」でお

申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口

座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座

番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へ

ご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒

の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻

布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-

2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお

問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口

131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管

理部配送センター ☎044-811-0417

読者からの便り

奉仕の喜び

病院ボランティア協会の一員である私は、地元の学校から奉仕について講演の依頼を受けました。協会のボランティアたちは病院の患者に無料でいろいろなお手伝いをしています。ボランティア全員の中で、その日に話ができるように都合をつけられたのは、私だけでした。

これがどれほどすばらしい機会か、私にはよくわかっていました。若い人たちに私たちボランティア協会の仕事を紹介するだけでなく、奉仕への望みを起こさせるには、何を話せばよいかと考えました。

祈りの気持ちで靈感を求めていると、良きサマリヤ人のたとえ話(ルカ10:30-37参照)について話すべきであると強く感じました。

さらに、時代に合った事例についても探し始めました。「ラ・ステラ」(イタリア語版。「星」の意)のバックナンバーを見ていると、L・トム・ベリー長老の記事に目が留まりました。そこには、目の不自由な人々のためにスキーのインストラクターとして時間を捧げている若者の話が紹介されていました。それから、奉仕の精神について取り上げたトーマス・S・モンソン副管長の大管長会メッセージも見つけました。

当日、私は600人の生徒たちの前で話しました。とてもあがっていたので、必要な助けが与えられるように祈りました。15分ほど、同胞への奉仕を促す話をしました。私は幸福の探求につい

て触れ、人々に奉仕して初めて真の幸福を味わうことができると話しました。

さらに大切なのは、私がこの教会の会員であることを伝え、専任宣教師たちの働きについて話ができただけです。

生徒たちは熱心に耳を傾けてくれました。私の話を聞いて感動した人が大勢いたようです。私は主に感謝しました。この講演が、将来、何人かの若者たちを福音のメッセージに備えさせる機会となれば幸いです。

国際機関誌を刊行してくださる皆さんの働きに感謝しています。

イタリア、ラスペーチア
ファブリジオ・ジアネリ

力を得ています

気持ちの落ち込んだときや失望したときでも、私は「リアホナ」(スペイン語版)の記事を読むと心が明るくなり、力を得ることができます。これは本当に幸せなことです。私は感謝の気持ちでいっぱいです。

この機関誌が何か国語にも翻訳されることを願っています。

また、教会がさらに発展し、伝道に出る年齢の若者たちが伝道に出、このみ業の神聖さを世に力強く証できるように、お祈りします。

ドミニカ、サンティアゴ
レオネル・アコスタ

編集部より—教会の国際機関誌はラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジア、南太平洋の各地域で、20の言語に翻訳、出版されています。

The Seto No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seto No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.



感謝を神に捧げん

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

「感謝を神に捧げん 予言者の導き……。」(賛美歌11番)教会では心を奮い立たせるこの賛美歌をよく歌います。これは末日聖徒だけの歌です。私たちはほかの教会で歌われている歌を何曲か歌い、ほかの教会も私たちの教会の歌を歌います。しかし「感謝を神に捧げん 予言者の導き 末日に福音を……」と歌えるのは私たちだけなのです。

この曲は今から1世紀余り昔、英国シェフィールドに住む貧しい境遇の一男性が書いたものです。彼は製鉄工場で働いていましたが、モルモン教会に入ったために解雇されてしまいました。しかし彼の胸には熱い証が燃えていました。彼はあふれ出る感謝の思いに筆を執り、この感動的な歌詞を書いたのです。その言葉は世界数百万の人々の感謝の歌となりました。私は、この歌が神よりの啓示を感謝する敬虔な祈りとして歌われるのを、様々な言語で聞いてきました。

私たちはこの混迷した困難な時代を歩むときに、神より賜わった知恵ある言葉をもって、私たちに勧告する予言者の存在を、いかに感謝すべきでしょうか。またいかに感謝しているでしょうか。私たちが心に抱く確信、すなわち、神はその召された僕たちの口を通して民にみこころを伝えられるという確信は、私たちの信仰と行動の真の礎となっています。私たちには予言者がいるか、それとも無か、のどちらかなのです。しかし現実に予言者はいて、私たちはすべてのものを所有しているのです。

何十年も前のことですが、私は責任を受けて香港に本部を置く伝道部の伝道部長に同行し、フィリピンの伝道を正式に開始しました。1961年4月28日に初めての集会が開かれましたが、それは出席した私たちにとって決して忘れられないものでした。その時集会を行なえるホールが見つからなかったのです。そこでアメリカ大使館に交渉し、マニラ近郊のフォートマッキンレーのアメリカ



エズラ・タフト・ベンソン
大管長(左)は、
ジョセフ・スミス(上)以来、
高貴にして神聖な
神の予言者の召しを
正当に受け継いでいる。

陸軍基地内にある大理石造りの記念館の美しいポーチで集会を開く許可を得ました。集会は朝の6時半に始まり、悲劇の戦争を記念する神聖な場所で、平和の福音を伝えるみ業が始まったのです。

私たちはたったひとりだけ探し当てることのできたフィリピン人教会員の家を訪ねました。彼が聞かせてくれた話は、おおよそ次のようなものでした。

彼は少年の時に、ごみ箱の中にばらばらになりかけた古い雑誌「リーダーズダイジェスト」が見つけたのです。そこにはモルモン教徒についての本の要約が載っていました。ジョセフ・スミスのこと書かれてあり、「予言者」と説明されていました。「予言者」という言葉は少年の心に強く響きました。この世の中に本当に予言者がいるものだろうか。彼はいぶかりました。その雑誌はなくなりましたが、生ける予言者がいるという話は、暗く長い戦争の間も、フィリピンが占領されていた圧制の時代も、彼の心を去ることはありませんでした。

やがて戦争は終わり、合衆国政府はクラーク空軍基地を再開しました。デビッド・ラグマンという名のそのフィリピン人は基地に就職し、自分の上司となった空軍将校がモルモンであることを知りました。彼は将校に予言者を信じているかどうか聞いたかかったのですが、聞くのを恐れました。心の葛藤が続いた挙句に、ようやく尋ねる勇気が出ました。

青年は聞きました。「あなたはモルモンですか。」

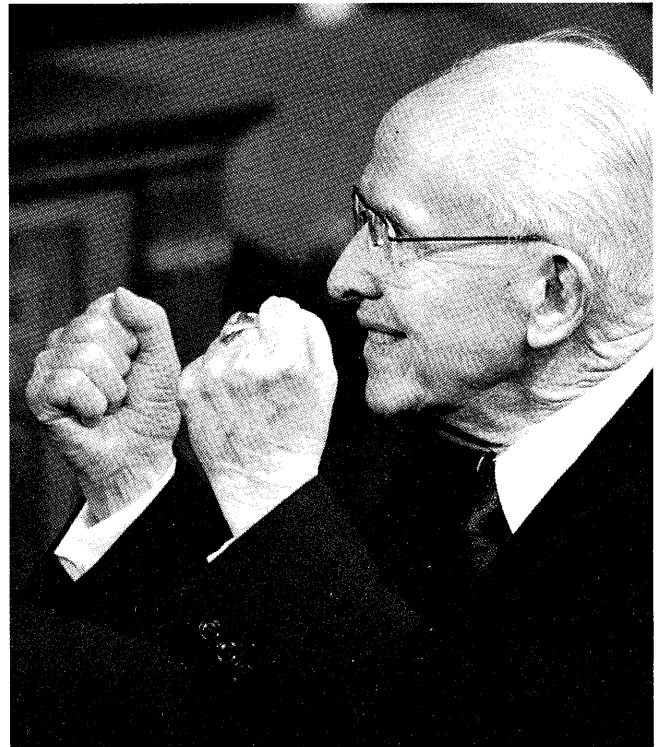
即座に「はい、そうですよ」との答えです。

「あなたは予言者を信じていますか。あなたの教会に

.....
ベンソン大管長は、聖徒たちとの交わりを大切にしている。(左)

人生に対するベンソン大管長の熱意は、総大会参加者への力強く、親しみの込めた歓迎によく表われている。(右)

COURTESY OF THE CHURCH NEWS



は予言者がいるのですか」と、真剣な質問が続きました。

「はい、予言者がいます。生きた予言者です。私たちの教会を管理して、主のみこころを教える人なのです。」

デビッドは将校にさらに詳しいことを教えてもらい、その後バプテスマを受け、フィリピン人で最初に長老に聖任されました。

自分たちに関心を寄せておられる神のみこころを伺い、それを私たちに教えてくれる人を長に持つこと以上に大きな祝福があるのでしょうか。私たちは、「賢き者の智恵も滅し、慎み深き者の覚りも物の数〔ではない〕」(教義と聖約76：9)ことを知るのに、世の中をあちこち探し歩かなくてもよいのです。世の探し求めるべき知恵は、神よりの知恵です。世を救う唯一の悟りは、神についての悟りです。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされぬ。」(アモス3：7)

これはアモスの時代もどの時代も同じです。聖なる神の人々は、聖霊に感じて語りました。(IIペテロ1：21参照)それらの古代の予言者は来たるべきことを警告したばかりか、それよりもさらに重要な、民に対する真理の啓示者となりました。生活に平安を見だし、幸福になるにはどのように生きるべきかを教え示したのは、予言者でした。

ある青年のことが思い出されます。彼はキリスト教徒としていろいろな教会を巡り歩きましたが、どこも現代の予言者について教えてはいませんでした。予言者たちをあがめるのはユダヤ人の間だけで、そのため彼はユダヤ教を受け入れ、信奉しました。

1964年の夏、彼はニューヨーク市へ行き、万国博覧会を見物しました。そこでモルモンパビリオンに入り、旧約聖書の予言者たちの絵を見ました。エホバのみこころを啓示した昔の偉大な人々について、宣教師が感謝を込めて話すのを聞くうちに、彼の胸は熱くなってきました。そしてパビリオンの先に進むと、近代の予言者について、また予言者、聖見者、啓示を受ける者といわれるジョセフ・スミスについて説明がありました。何か彼を動かしました。彼の霊が宣教師の証にこたえたのです。彼はバプテスマを受けました。そして南米で伝道し、家

に帰ってからも、家族やほかの人々を教会に導く器となりました。ジョセフ・スミスが真に神の予言者であり、彼に続く予言者たちもその神聖で高貴な責任の正当な継承者であると彼が証するのを聞くと、私の心は温かくなります。

偏見を差し挟まずにジョセフ・スミスの話を読むならば、彼が来たるべきことを告げ知らせる偉大な予言者であったことを一体だれが疑い得るでしょうか。銃口が火を吹く30年近くも前に、彼は悲劇のアメリカ南北戦争を予言し、それ以後地上のあらゆる国々に戦争が起こると述べました。この世代のあなたがたや私が、その驚くべき言葉が成就されたことの証人です。

ジョセフ・スミスの継承者にしてもそうでした。1849年の厳冬のある日、ソルトレーク盆地の先駆者たちがセゴユリの根とアザミの葉で飢えをしのいでいる時、カリフォルニアで金が発掘されました。この地の窮乏状態を脱して、将来のあるカリフォルニアへ行くのだと考えた人々に向かい、テンプルスクウェアの初期の集会所に立ったブリガム・ヤングは、予言の言葉を告げました。その中で彼はこう言っています。

「私たちはなべの中から火の中へ、火の中から床の真ん中へ追い立てられてきた。私たちは今ここにいる。そして将来もここにとどまる。……私たちはこの地に至高者なる神に捧げる神殿と町を建設する。私たちは開拓地を西に東に、南に北に広げ、多くの人々が住む町々を建設するだろう。そしてそれにも増して多くの聖徒が世界各国から集まるであろう。ここは各国の大路となるであろう。王と皇帝と世の貴き者、賢き者がここに私たちを訪れるであろう。」(ジェームズ・S・ブラウン「開拓者の暮らし——ジェームズ・S・ブラウン自叙伝」pp.121—122)

現在のテンプルスクウェアに立ち、毎年何百万もの人人がここを訪れるのを見れば、ブリガム・ヤングが予言者として語ったことに、何の疑いが持てるでしょうか。ここ何年も、要人が列を成して大管長会事務局に足を運び、私たちが教会の大管長、現在の予言者として支持する人との面会を求めています。そこには世界各国の政治、経済、教育など、各界の指導者が見受けられます。彼らは、教会員がのけ者にされ、山間の荒野で孤立していた

時代にブリガム・ヤングが「世の貴き者、賢き者」と語った人々です。

飛行機でサンフランシスコからオーストラリアのシドニーに向かった時のことです。機上で、近くの席に座った青年が「アメリカの予言者ジョセフ・スミス」という本を読んでいるのに気づきました。私は機会を逃さず彼に話しかけました。自分もその本を読んだことがあり、著者を知っていることを話してから、何に関心があるのか尋ねてみました。彼はいろいろと答えてくれましたが、中でも予言者に関心があり、現在も予言者がいるという点に興味をそそられたと言いました。また、図書館でその本を見つけたとも言いました。ふたりで時間をかけて話をした中で、私はジョセフ・スミスが本当に予言者だったことを証しました。ジョセフ・スミスは将来起こる事柄を語りました。しかしそれ以上に大切な点は、彼が永遠の真理の啓示者、主イエス・キリストの神聖な使命の証人だったことです。

私は、予言者として、全能者のみ手に使われてこの業を回復したジョセフ・スミスに対してだけでなく、彼に続いた人たちに対しても深く感謝しています。彼らの生涯を研究すれば、主がいかにして彼らを選び、永遠の目的にかなうように練り鍛えられたかがわかります。ジョセフ・スミスはある時このように語りました。「私は、高い山から転がり落ちるごつごつした大きな岩のようなものである。……そこかしこの角が砕き削られていくとき、私は全能者の矢筒の中の、滑らかに研ぎ澄まされた矢となるのだ。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 304）

ジョセフ・スミスは憎まれ、迫害されました。追い立てられ、投獄されました。ののしられ、打ちたたかれました。その生涯を知れば、ジョセフ・スミス自身の語った変遷の跡を見て取ることができます。一生の間に力は増し加えられました。鍛練されました。自分の命よりも他人を愛する愛が養われました。ごつごつした岩の角が削り取られて、彼は全能者のみ手の中の研ぎ澄まされた矢となったのです。

ジョセフ・スミスの後を継いだ人々も同じでした。長年の献身的な働きの中に、彼らは研ぎ澄まされ、選り分けられ、鍛えられて、全能者の目的にかなうように造り

上げられたのです。ブリガム・ヤング、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョセフ・F・スミスらの生涯について読めば、だれがそれを疑い得るでしょうか。主は彼らの心を和らげ、性質を練って、後に彼らに負わせたもう大いなる神聖な責任の備えをさせられたのです。それは、愛する指導者、現在の大管長エズラ・タフト・ベンソンについても同じです。

私はみたまの証を受けた者として、ベンソン大管長の予言者の召しを証し、地上数百万の民と声を合わせて「感謝を神に捧げん 予言者の導き 末日に福音を……」と歌いたいと思います。主の僕である大管長によって明らかにされる主のみこころを行なうとき、この民にもたらされる平和と進歩と繁栄に私は心が満たされます。もし私たちが彼の勧告を守らないならば、彼の聖なる召しを否認することになります。しかし、彼の勧告に従うなら、私たちは神から祝福されるのです。

では、ひとつの民としての私たちに向けられた、エズラ・タフト・ベンソン大管長の勧告にはどのようなものがあつたのでしょうか。私たちは、道を外れさまよっている教会員が、再び活発に教会に集えるよう、彼らを捜し出し、愛を込めて迎え入れるよう勧告されたのではなかつたのでしょうか。

私たちは、器の内側、すなわち主のみ前における汚れを清めるようにと勧告されなかつたのでしょうか。モルモン経の教えとそれに伴う力とみたまを、絶えず生活に取り入れるように、また、モルモン経は、特に主の末日のみ業のために、主の指示を受けて備えられたものであることを、個人的に理解するよう勧告されなかつたのでしょうか。私たちが行なうすべてのことに主のみたまを求めるよう勧告されなかつたのでしょうか。気を落とさずに主を信頼するよう勧告されたのではなかつたのでしょうか。神のみこころに逆らうという、大きなつまずきの石に対して勧告を受けなかつたのでしょうか。大管長は、何度も繰り返して、キリストのみもとに来るよう、またキリストに思いをはせるよう、そしてキリストに従うために、必要ならば大きな改心をするよう、さらに生活全般にわたってキリストを模範とするよう勧告されなかつたのでしょうか。

昔、ヨシャパテが語った次の言葉を現代の私たちも心

に留めるとよいでしょう。「あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう。」(歴代下20:20)

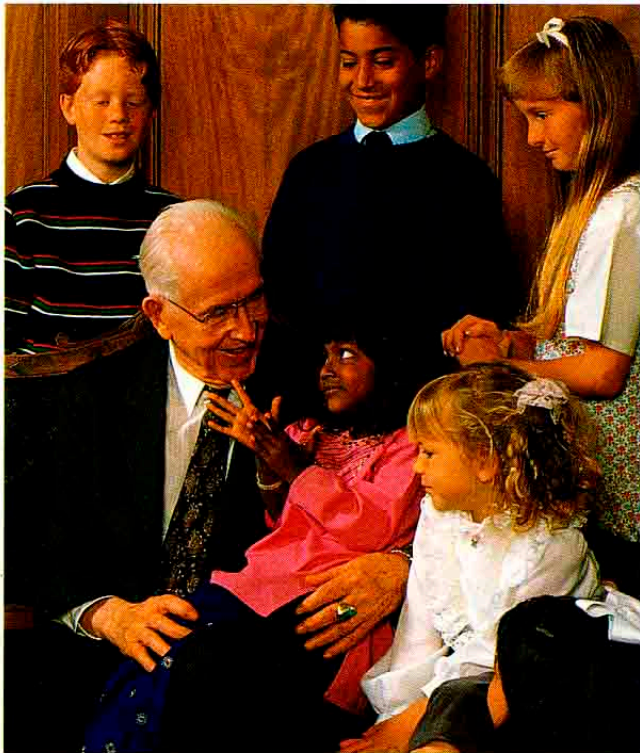
神は生きておられ、永遠の真理を啓示されます。イエス・キリストは私たちの救い主であり、この教会の頭です。地上には予言者がいて、聖見者、啓示を受ける者として私たちを教えてください。そして、その教えに従うよう、神は私たちの心に信仰と修養とを与えてくださるのです。□

予言者に召された時、ベンソン大管長は次のように語った。「私は天父のすべての子供たちを愛しています。」カウボーイハットをかぶって、くつろいだ様子のベンソン大管長(右)

話し合いのポイント

1. 私たちは、「賢き者の智恵も滅し、慎み深き者の覚りも物の数〔ではない〕」ことを知るのに、世の中をあちこち探し歩く必要はない。
2. 私たちの信仰と行動の真の礎となっているのは、神が、その召された僕たちの口を通して民にみこころを伝えられるという確信である。
3. 私たちは、主のみ手に使われてこの業を回復したジョセフ・スミスに対してだけでなく、愛するエズラ・タフト・ベンソン大管長を含む、ジョセフ・スミスに続いた人々に対して深く感謝している。
4. この民の平和と進歩は、大管長によって明らかにされる主のみこころを行なうときにもたらされる。

PHOTOGRAPH BY WELDEN ANDERSEN



PHOTOGRAPH BY JED CLARK





この歌を 聞いてください

リチャード・M・ロムニー

そっと心を澄ましてください。サデの歌声から音楽を超えた何かが聞こえてきそうです。

フィンランドにあるその高校の廊下からは、教室を行き交う生徒たちのにぎやかな笑い声や話し声が聞こえてきます。

ところが、この音楽ホールの中では、金色に縁取られたアーチ型の窓に遮られて、そうした物音は遠く消えてしまいます。そして今、ピアノを弾き始めようとする15歳のサデ・メツァタハティの周りでは、静かな平安が彼女を包んでいます。

サデはクラシックでもポピュラーでも、どんな曲でも演奏できます。でも今は、弾き語りですら1曲しか歌える時間はありません。彼女は自分の好きな歌を選びました。それは単調な曲でありながら心に残るものです。16歳の

サデ、弟のベサ、親友のサリアの耳に聞こえる信仰と愛の歌に、皆さんも耳を傾けてください。

サリア・カルフネンも一緒に歌い出しました。ふたりは幼いころからの友達なのです。ふたりの力強いハーモニーの中には、どこかしらその友情が感じられます。ふたりの歌が終わりました。「この歌を歌っているときは、祈っているような気持ちになります」とサリアが語ると、サデもうなずきました。

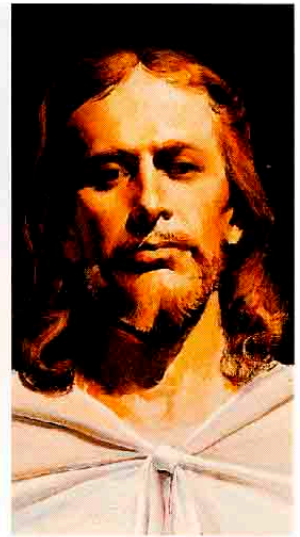
末日聖徒が作詞したこの曲には「自分を振り返る」という意味の英語名がタイトルに付いています。しかし、サデの母親であるビルピ姉妹が訳したフィンランド語の曲には、「心の中をのぞいてみると」という、もっと深い意味のタイトルが付けられました。(訳注——邦題『心のうち』『心の歌』pp.86—88)

「この曲を作ったのは私じゃないけれど、弾くたびに私の曲だって気がするの。気をつけて聞きさえすれば、だれでも、どんな物でも、その物自体の曲を持っているのです。」

2度目のベルが鳴りました。演奏時間の終了です。サデとサリアは、音楽の素質に恵まれた生徒たちのための学校「プーランマエン・コール」という音楽院の、厳しい指導を受けているのです。音楽のほかにも、サデはスウェーデン語、数学、フィンランド語、体育、英語、







「心の中に福音を抱いていれば、どんなことの中にも救い主を見いだし、そのみ声を聞くことができます。学校で語学を学んでいるときでも、草花を見つめ、友達と一緒にいるときでもそうです。」サデはそう結んだ。

生物、地理、そしてフランス語の授業に出ています。

サデとサリアは、毎日、セミナーも勉強していて、週に1度、ワード部のほかのセミナーの生徒たちと集会を持ちます。

この日の晩、教会では活動の夕べがあり、セミナーの生徒やインスティテュートの学生、スカウト隊、家族歴史活動の関係者、そのほかワード部の会員たちがそれぞれの目的を持って集いました。全員が兄弟姉妹としての働きをなすためです。

「どうしたらイエス様にもっと近づけるでしょうか。」セミナー教師のアウリ・ハイッコラが尋ねました。

「聖典を勉強する。」生徒のアキ・ケスキネンが答えます。

「祈る。それから教会に行く。」同じくトッド・カチックが答えました。

「家族と救い主について話す。」ユッカ・メレンルーロも言います。

「人に親切にする。」ヨニ・ミッコネンも発言しました。

レッスンの後、何人かの生徒たちが残って話をしています。彼らの話といえば、伝道に出る準備をするのにセミナーが役立つこと、早起きして聖典を勉強していること、祈り、家族、神権、聖霊など、およそ教会の青少年が経験する様々な事柄が話題に上ります。

「フィンランドでは宗教の話をする人はあまりいませ

ん」とマリア・ソコリは語ります。「年に1、2回教会に行くだけで、信仰が私の生活の中でどんなに大切かわからないんです。」

「教会員じゃない友達も私を大切にしてくれます。でも、アルコールを飲んだり、私がしないことを友達がするとき、やっぱり交際が大変だなと思います。」ヘイディ・ハンキアラはそう言います。

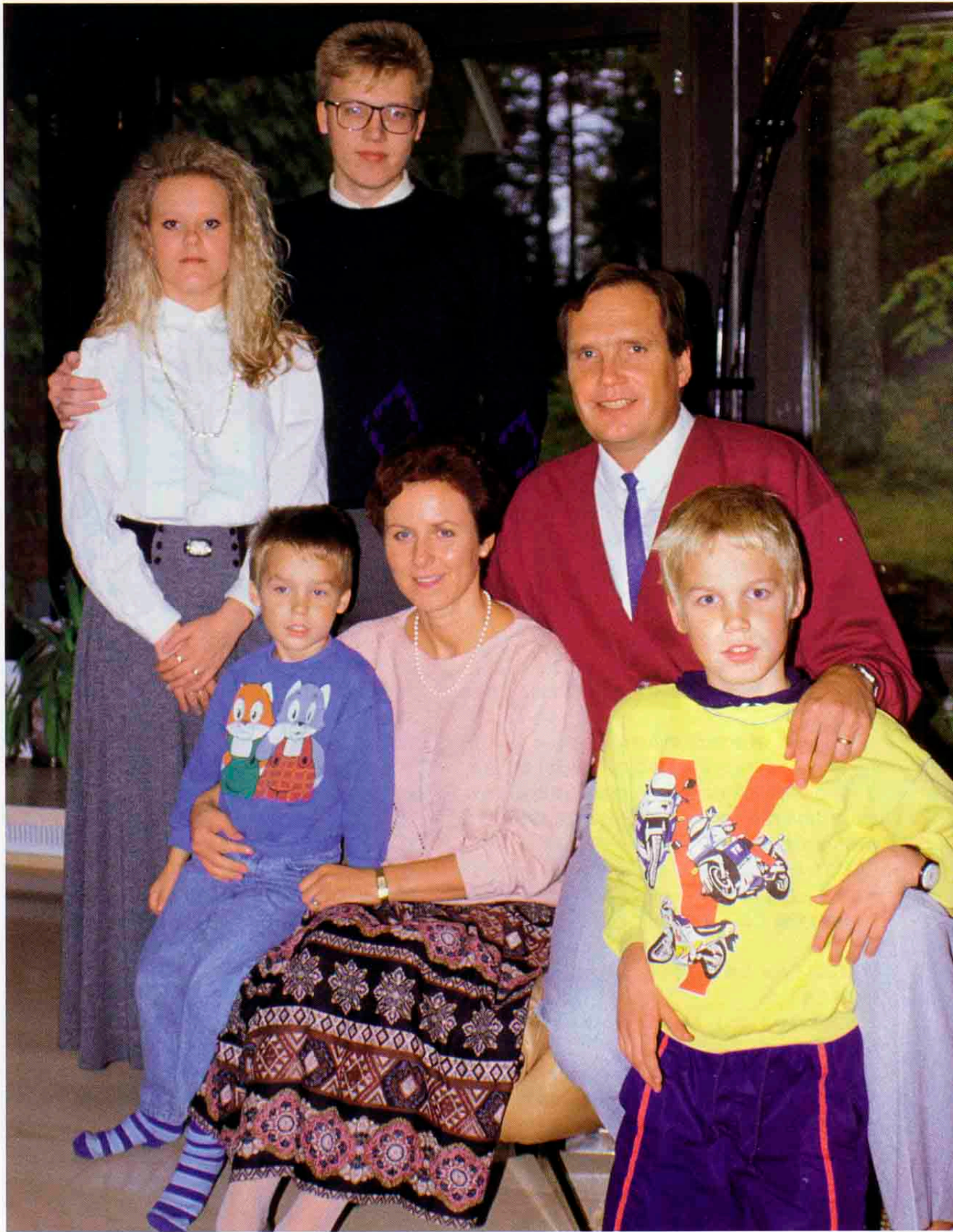
「マリアもヘイディもサリアも私も、みんな小さいころから福音のある環境の中で育ちました。このワード部の人たちもほとんどがそうです。でも今は教会がどんどん大きくなっていて、将来、もっともっと大きくなる日が来るでしょうし、これからはフィンランドだけでなく、ロシアでも、東欧でも、世界中で若い人々が大量教会に加わると思います。教会は将来さらに発展するでしょうし、その教会の将来を担うのは若い人たちですもの。」こう説明するのはサデです。

話は尽きませんでした。ここで終わりにになりました。青少年たちは互いに別れを告げて、帰途に就きます。セミナーの教室から人影が消え、建物にはほとんど人が残っていません。

その時です。またあの歌声が聞こえてきました。

お母さんが迎えに来るのを待つ間、サデはピアノを見つけました。学校の音楽ホールにあるようなつつやと輝く黒い優雅なグランドピアノではありません。鍵盤がひとつふたつ欠けた、表面に傷のあるアップライト型の茶色のピアノです。それでも彼女の弾く曲は変わりません。それはやはり「心の中をのぞいてみると」でした。

こうして信仰の歌は続きます。□



スオミ

フィンランド

バルト海の灯台

ジャイルズ・H・フローレンスJr.



「神は、地球の創造を終えられた時、残った樹木の種をみな、このスオミに落とされた」という言葉があります。フィンラ

ンドの国名を表わす「スオミ」という言葉は、フィンランド語で「湖沼の地」という意味があります。北極圏のラップランド地方から南のバルト海に至るまで、フィンランドの全土は、松、トウヒ、樺といった緑の樹木で厚く覆われています。その緑があまりにも濃いために、上空から見ると、この国はまるで海に浮かぶ巨大な緑のこけのようです。

フィンランド人は、自分たちの国民性を「シス」という言葉で表わしています。「あきらめるな、頑張れ」という意味です。この言葉どおりの活力、決意、大胆さ、そしてときには頑固さといった国民性があったからこそ、おそらくは、旧ソビエトの衛星国になることを拒み続けられたのかもしれませんが。過去200年の間に、フィンランド人は幾度も強大なロシアの軍隊を撃退してきました。1940年には、東カレリヤの愛する森林地帯を旧ソビエトに奪われ、国土の10分の1を失ってしまいましたが、それでもフィンランドは独立を維持し、自由の灯台の役割を果た

ヘルシンキのベサ・リンナネン兄弟と妻のセイヤ姉妹は、4人の子供たちが真理を学べるように指導するうえで福音が大きな意味を持っている、と語る。

し続けました。

フィンランド人がひとたび福音の教えに改宗すると、その「シス」精神と信仰がひとつになって、極めて信仰深い教会員を生み出します。この地において教会の成長は、世界のほかの地域ほど速くはありませんが、バプテスマを受け、新しく迎え入れられた会員たちのきずなには、実に強いものがあります。

聞き覚えのある響き

マッティ・サルミ、キルスティ・サルミ夫妻も、このフィンランド人特有の決意と信仰がひとつになった好例です。ふたりは、ボスニア湾の北端にある西海岸の町ケミに住んでいます。ここは北極圏から100キロと離れていません。1988年に、サルミ夫妻は、自国で働くために召された最初の夫婦宣教師となりました。

キルスティは宣教師から福音を学び、1973年にクオピオで教会に入りました。福音の教えは、「聞き覚えのある真実の教えでした。とくにモルモン経を読んだ後でそう感じました。」1978年、マッティが48歳の時、長老たちが「決して否定できないような強いみたまを携えて」やって来て、彼もまたバプテスマを受けました。やがて、1981年の夏に、ふたりはスイス神殿で出会ったのです。

マッティはこう言います。「宣教師として伝道に出る召しをいただいた時、本当にうれしく思いました。伝道に出て1週間もしないうちに、後に改宗することになる人たちに会い、教え始

めました。1カ月後には、その人たちがバプテスマを受け、それから次々にバプテスマがあったのです。」

キルスティは夫の言葉に付け加えて、こう言います。「私たちの教えた人たちがたとえバプテスマを受けなくとも、レッスンは無駄になったと感じたことはありません。むしろ、はっきり理解できる日が来れば、その中から教えを受け入れてくれる人もたくさん出ると思います。」

ふたりの働きによって、サボンリンナで3人の若い改宗者が生まれました。美しいサボンリンナの町では、毎年、フィンランドのオペラフェスティバルが開かれます。フィンランドには18万もの湖がありますが、この町は、その最大の湖の真ん中に浮かぶ大きな島にあり、絵のように美しい町です。サルミ兄弟は、「私たちはその美しい町で本当に楽しくみ業を進めることができました。その会員たちは、福音のためなら何でもしてくれくれます。いつでも私たちの伝道の助けをしてくれたものでした」と、言っています。

サルミ夫妻は、「ふたりで一緒に永遠の原則について教え、人に愛を示すことによって、私たち自身の夫婦のきずなも、想像以上に深め、強めることができました」と語っています。

真心から分かち合う

フィンランド人の大部分はフィンランド語を話しますが、それでもお隣のスウェーデンと共通しているものは数多くあります。まず、南部と西部の海岸沿いには、スウェーデン語を話す少



COURTESY OF FPG INTERNATIONAL



上—フィンランドの湖水地方
下—フィンランド・ヘルシンキ東伝道部で働くフィンランド出身のハリ・アホ長老(左)とアメリカ人同僚

数民族が大勢住んでいます。道路標識や公式文書も、普通は、フィンランド語とスウェーデン語の2か国語で書かれています。フィンランドの公式名称である「スオメン・タサバルタ」という名称も、「スオミ・フィンランド」と表記される場合がたびたびあります。「共有し互いに学び合うフィンランド人の国民性のおかげで、この国は福音を宣べ伝えるには、とても良い土地です」と語るのは、フィンランド・タンペレステーキ部のベッカ・ロトステーキ部長です。さらに続けてこう述べています。「しかし、様々な理由があって、私たちが望むような速さで成果

が現われているわけではありません。ひとつには、古くから国民に浸透した宗教の根強い影響があって、それらの教会に集う人々の数は多くないのですが、信者たちにいわゆる『シス』の気持ちがあることです。そのため、ほかの教会の話には興味を持ってくれないのです。

しかし、私自身は、フィンランドで福音を広めるうえでの最大の障害は、皮肉なことに、わが国の生活水準が高いことにあるのではないかと考えています。世界の多くの国民と同様、フィンランド人も非常によく働くため、自分の生活に霊的なものを取り入れる余地がほとんどないのです。」政府から国民に対してかなり多くのものが支給されるため、犠牲を払うという気持ちになりにくいのだと言います。しかも、予言者ジョセフ・スミスの教えによれば、その犠牲こそが宗教には欠くことのできない要素なのです。

フィンランド・ヘルシンキステーキ部のセッポ・フォルスマンステーキ部長は、「神権指導者たちは、いつでも進んでみ業に携わり、しかも喜んで責任を果たしてくれます。ただ、今はもう少し時間が必要です」と語っています。ステーキ部が組織された1976年当時は、前後2年にわたって、教会も急速に成長しました。その後、1988年までは穏やかな成長が続きます。しかし、再び成長を始めた今、新しい改宗者に対するフェローシップの努力の成果も現われて、定着率も75パーセントに増加しています。

1990年1年間では、フィンランドで伝道する120人の宣教師によって、125人が教会に入りました。その結果、フィンランドの教会員数はちょうど4,200人を超えました。現在、フィンランドには、人口の集中している南部

にステーキ部がふたつあります。11のワード部と19の支部があり、加えて3つの地方部が組織されています。

使命感にあふれる若人たち

タンペレステーキ部に所属する資格ある若人のうち、半数以上が現在専任宣教師として働いています。ふたつのステーキ部とも、青少年の信仰は強く、伝道に出る備えが十分にできています。若い男性と若い女性のうち、70パーセントが活発で、そのうち80パーセントがセミナーに出席しています。

フィンランドに住む末日聖徒の親たちは、大部分が教育に深い関心を持っており、子供たちにも大きな期待を寄せています。さらに、福音の標準に従った生活を送ることにより、青少年は自分自身の小さな望みを超えた、大きな目標を持つようになります。「そうした恵まれた状況のおかげで、教会の青少年たちは人並み以上の人物になりたいと思うようになり、人の世話をしたり、親切にしたりすることが容易にできるようになります」と語るのはロトステーキ部長の妻のアンナ・カーリナ姉妹です。この夫妻の子供たちは、マッティ、リーサ、カイサの3人とも、学校ではずっと指導的な責任を果たし、学業成績も優秀です。リーサはユタ州で伝道しました。マッティは現在フランスに留学中ですが、フィンランド議会で、フィンランドの環境保全のために意見発表をしたことがあるほどです。

注目を集める

生活費の高騰のために、国全体の1夫婦当たりの子供の数は平均1.8人であり、そのために働きに出る母親が大部分です。タパニ・フリストロム、シ



1987年から1990年までフィンランド・ヘルシンキ伝道部で伝道部長を務めたスティーブン・ミーチャム長老と妻のドナ姉妹を訪ねるマッティ・サルミ兄弟と妻のキルスティ・サルミ姉妹(右)。サルミ夫妻はフィンランドで働く召しを受けた、フィンランド人初の夫婦宣教師。

ニッカ・フリストロム夫妻の家族のように、家族が11人もいると、問題もけた違いに大きくなります。

フリストロム家族は、いつでも自分たちで正しいと考えることを行ないた

いと努めてきました。もしこのふたりの「シス」精神が弱かったら、シニッカにしても、間違いなく高給を保証してくれるだけの仕事に就いていたことでしょう。たとえば、フィンランドでも有数の製薬会社の研究員になるよう要請されたり、ヘルシンキ大学で教職に就いてはどうかと言われたりしました。彼女はヘルシンキ大学では優秀な学生だったからです。しかし、シニッカは家族中心の生活をしようと思決しました。現在、シニッカはワード部オルガニスト兼初等協会ピアニストとして働いています。そしてタパニはステーク部高等評議員を務めています。

フィンランドでは大家族といっても、必ずしも物笑いの種になるわけではありませんが、少なくとも注目を浴びることは確かです。そして、たびたび質問を受けます。ヤルッコ・メツァタハティと妻のビルピが一番頻繁に受ける質問は、「経済的に人並み外れて豊かなわけでもないのに、どうやってそんなにたくさんの子供を養っていけるのですか」というものです。ヤルッコ、ビルピ夫妻はそのたびに「いいえ、豊かです」と答えたい衝動に駆られます。7人の子供たちがいるからです。

メツァタハティ家族は、南海岸沿いのツルクに住んでいます。ここは



ヘルシンキのタバニ・フリストロム兄弟と妻のシニッカ姉妹、およびその子供たち。左から順に、ユル、オツツォ、ビルビ、トゥーリー、ブル、クッカ、メリ、ピサ。ほかにもうひとり、スピ（現スキナー）がいる。右——11歳のユハ・リンナネン。

1812年までフィンランドの首都であった町です。彼らの建てた家の周囲には、古い大きなりんごの木が12本以上植えられています。ヤルッコは自分で会社を興して、教育用のコンピュータソフトを製作し、それを世界中で販売して

います。ヤルッコは、こう言っています。「私たちにとっては、家族が生活そのものです。妻も私も、子供たちほど大切な関心事はありません。」

メツァタハティ家族には、男の子が4人と女の子が3人います。娘のサデをはじめとして、子供たちはひとり残らず、音楽面や芸術面で何らかの才能に恵まれています。サデはピアノを弾き、歌を歌い、自分の洋服は自分で縫い、英語を勉強しています。（本誌『この歌を聞いてください』p.8参照）

一方、母親のビルビも、大学で科学の学位を取った向学心のある主婦で

す。ステーキ部のコンサートの計画を立てるのは彼女の楽しみのひとつであり、これまで数多くの末日聖徒の賛美歌をフィンランド語に翻訳してきました。

ヤルッコはこれまで支部長や副ステーキ部長として働いてきました。しかし、教会で30年にわたって働いてきたヤルッコは、「これまで受けた責任の中で最も大切な召しのひとつであるスカウト隊長の責任を通じて、新しい物の見方」を学んでいます。彼の隊には、50人以上のスカウトがいます。最近、そのスカウトたちは、ルーマニアの難民のために募金活動を行ないました。

フィンランドでは、たとえ小さな家族であっても教会の家族は注目を浴びます。11歳のユハ・リンナネンの学校の先生は、リンナネン家の親子の時間の過ごし方は実にすばらしい、と両親に言いました。「とてもうれしい言葉でした」と語るのは、セイヤ・リンナネン姉妹です。現在ヘルシンキステーキ部のステーキ部扶助協会の指導者であり、21歳を先頭には4歳までの4人の子供の母親でもあります。

台所用品の販売を仕事とする夫のベサもこう言っています。「私は福音のおかげで得たものがたくさんあります。以前、私は子供というものは自然に育つと考えていました。しかし、福音の原則を教えられて、私には、子供たちが真理を学んでいけるよう導いていく責任があることがわかりました。妻と私は、自分たちも学び続けながら、主の知恵ある教えの中で子供たちを育てようと一生懸命努力しています。」

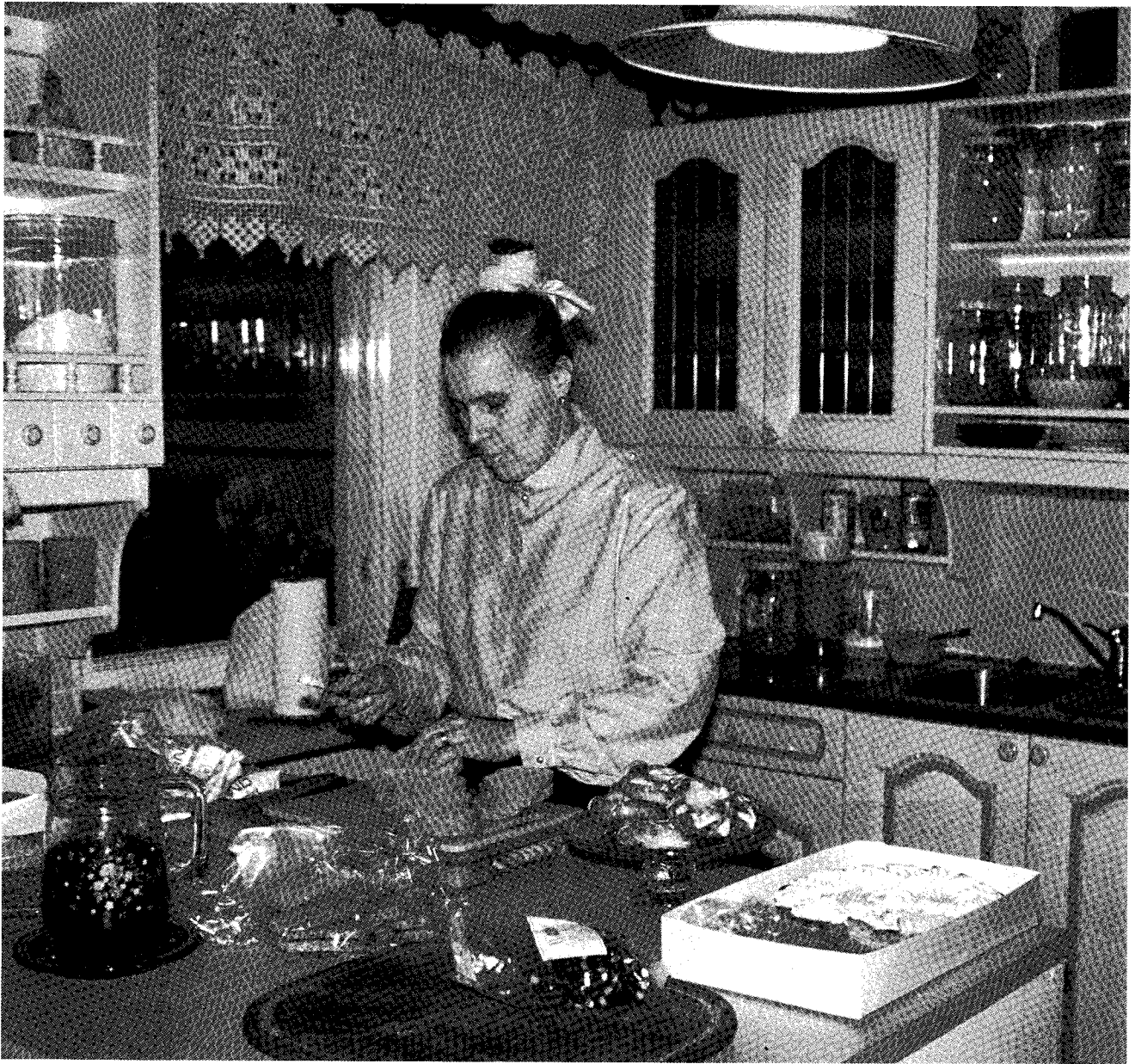
輝く光

「教会に集う人々の気持ちは世界中どこでも同じだとよく言われますが、それは本当です」と言うのは、エスプワード部に家族と共に住む、ビジネスマンのペルッティ・ポリモです。「でも、ぜひとも指摘したいのは、教会員の中に様々な国の人々がいるとい

うことです。主は地球を創造された時、ある目的をもって様々な人々を造られました。私たちはお互いに異なっているからこそ尊敬し合えるのですし、表面的な一致を求めて躍起になる必要はありません。福音が教えているのは、多様性を通じて得られる真の一致なのです。」

フィンランドの教会員たちは、どのようにして信仰の一致に到達しようとしているのでしょうか。それを知るためのひとつの方法は、王国を築くに当たって、様々な人々が、どのように仕





アルヤ・リルヤ姉妹は、台所で作ったおいしい料理をだれにでも分けてくれることで有名。彼女は商業制作の仕事に携わる夫のカリと共に、ヘルシンキ郊外に住む。

え合い、学び合い、犠牲を払い合っているかを観察してみることです。

たとえば、ヘルシンキ第3ワード部のハンヌ・ソルサの場合、伝道に出ることは大きな犠牲を意味しました。「私は音楽が大好きです。演奏したり、練習したり、作曲したり、編曲したりして毎日音楽に没頭していた私にとっ

て、福音を宣べ伝えるためとはいえ、2年間音楽を離れて伝道に出ることは、大きな犠牲でした。しかし、伝道に出たおかげで様々な祝福を受けています。」

現在28歳のハンヌは、シベリウス・アカデミーで音楽教育の学位を取得する最後の課程を取っています。この大学は、フィンランド最大の作曲家、ジーン・シベリウスを記念して設立された、フィンランドでは音楽の最高学府です。ハンヌはピアノもサクソホンもクラリネットも、さらに様々な打楽器もこなします。「ステーキ部の音楽の活動があると、ほとんど決まってハン

ヌは指導をしたり、監督をしたり、伴奏をしたりしてくれます」と語るのは、そうした活動でよく歌を歌うレーナ・ムルタマキです。

レーナはサバンリンナの出身で、父親はそのクオピオ地方部で地方部長をしており、彼女自身は、ヘルシンキにある教会翻訳部で働いています。レーナはこう言っています。「ここでは会員一人一人の良い働きが、小さな光です。私たちは数は多くありませんが、目立つ存在です。」

フィンランドの独身会員は、福音の教えのおかげでさらに深い愛を抱けるようになっています、と語るのはヘル

シンキステーキ部でシングルアダルトの指導者をしているミルヤ・スオンパーです。「私は教会が大好きです。教会の会員や活動、教えのおかげで私の人生は今とても充実しています。教会員になったところに比べても、今の方がずっと幸せです。物の見方も完全に変わりました。」

ミルヤは続けてこう言っています。「私が変わったことに、ほかの人も気がついていました。私には、新しいことの方がずっと大切になってきました。今では、以前に悩んでいたようなことで悩むことはありません。」

私は精神科担当の看護婦として働いていますが、福音のおかげで物の見方も変わり、そのために天父の子供たちがどのようなことを必要としているのか、理解できるようになりました。福音を知らなかった時には持ち合わせていなかったような忍耐力や精神力で、人に対してもっと慰めを与えることができるようになったと感じています。」

光の暖かさ

フィンランド中の教会員たちは、これまで折に触れて、極寒のフィンランド湾のかなた、昔のカレリヤの東部に住むロシアの隣人たちに、その温かい愛の精神を伝えてきました。宗教に対する政治的な拘束が取り除かれてからは、数多くのフィンランド人がソビエト各地で福音を伝えています。ラッペーンランタのヤーコ夫妻、オウルのライティン夫妻、ユバスキュラのランミンタウス夫妻、ラハティのキルシ夫妻、ヘルシンキのケンパイネン夫妻といった人々は、1989年以来、日曜日ごとにソビエトの末日聖徒を訪ねて、一緒に活動しています。最初のうちは、救い主についての証と愛を伝えるだけ

でした。やがて出席者も次第に増え、この忠実な人々は、ピボルグやサンクトペテルブルグ、タリンといった地で、新会員たちが自力で礼拝行事を行ない、神権の儀式を執り行なう備えができるよう、共に働き、組織し、訓練を施しました。

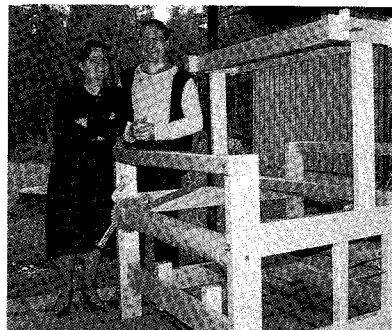
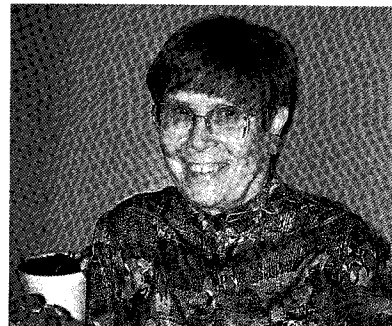
バルト地方部のユーシ・ケンパイネン地方部長はこう言っています。「1977年にカリ・ハイッコラがフィンランドで最初のステーキ部のステーキ部長に召されて以来、私たちはこの日の到来を待ち望んでいました。ロシアに住む愛する兄弟姉妹たちに福音を伝えることは、主から与えられた祝福です。人々は祈りと忍耐強い信仰によって、何年間も待っていたからです。」

「フィンランド人は長い間、旧ソビエトへ福音を携えて行くのは自分たちだと信じていたのです」と語るのはユタ州オグデン出身のスティープン・ミーチャム伝道部長です。ミーチャム伝道部長は、1987年にフィンランド・ヘルシンキ伝道部に召されました。

再びケンパイネン地方部長の言葉を聞いてみましょう。「旧ソ連でみ業が開始されてからというもの、私たちは、自分たちの歩む道がはるか以前から備えられていたように感じました。み業を進めるために、非常に多くのことが起こりました。偶然ではとても片付けられないようなことばかりです。この国の民は確かに主のみ手によって備えられていたのです。」

当時のソ連でフィンランド人による最初の伝道活動が開始されて以来、ソビエト各地で支部が発展し、3つの伝道部も組織されました。フィンランドの会員たちは今なお、援助の手を伸ばし続けています。

フィンランドの末日聖徒たちは、信仰と「シス」精神をもっていたために、



上——ヘルシンキステーキ部シングルアダルト指導者のミルヤ・スオンパー姉妹。下——ラッペーンランタに住むアイーモ・ヤーコ兄弟と妻のネリー姉妹も、ロシアの隣人たちに福音の教えを携えて行った。

自国で信仰堅固に、また忍耐強く、奉仕のみ業を続けてきました。そして、国境を越えてその光を放ち続けています。フィンランドの教会員たちは、暗黒と失意の時代があったとしても、不屈の信仰さえあれば、やがて無関心という霧はおろか、政治という壁さえ取り除けることを、身をもって体験してきたのです。

このようにして、フィンランド人の「シス」精神は、世界中の末日聖徒の信仰と愛を強めることに貢献しているのです。□

献身の力

十二使徒定員会会員
M・ラッセル・バラード

年を重ね、十二使徒定員会会員として長く奉仕すればするほど、私は主イエス・キリストに献身的に仕える人々の姿にさらに深い感銘を受けています。

以前、私はアンデス山脈の高地にあるボリビアのラパスでの地区大会を管理しました。会員たちはラパスやアルテプラノのあちこちに散在する小さな町や村から大会へやって来ました。

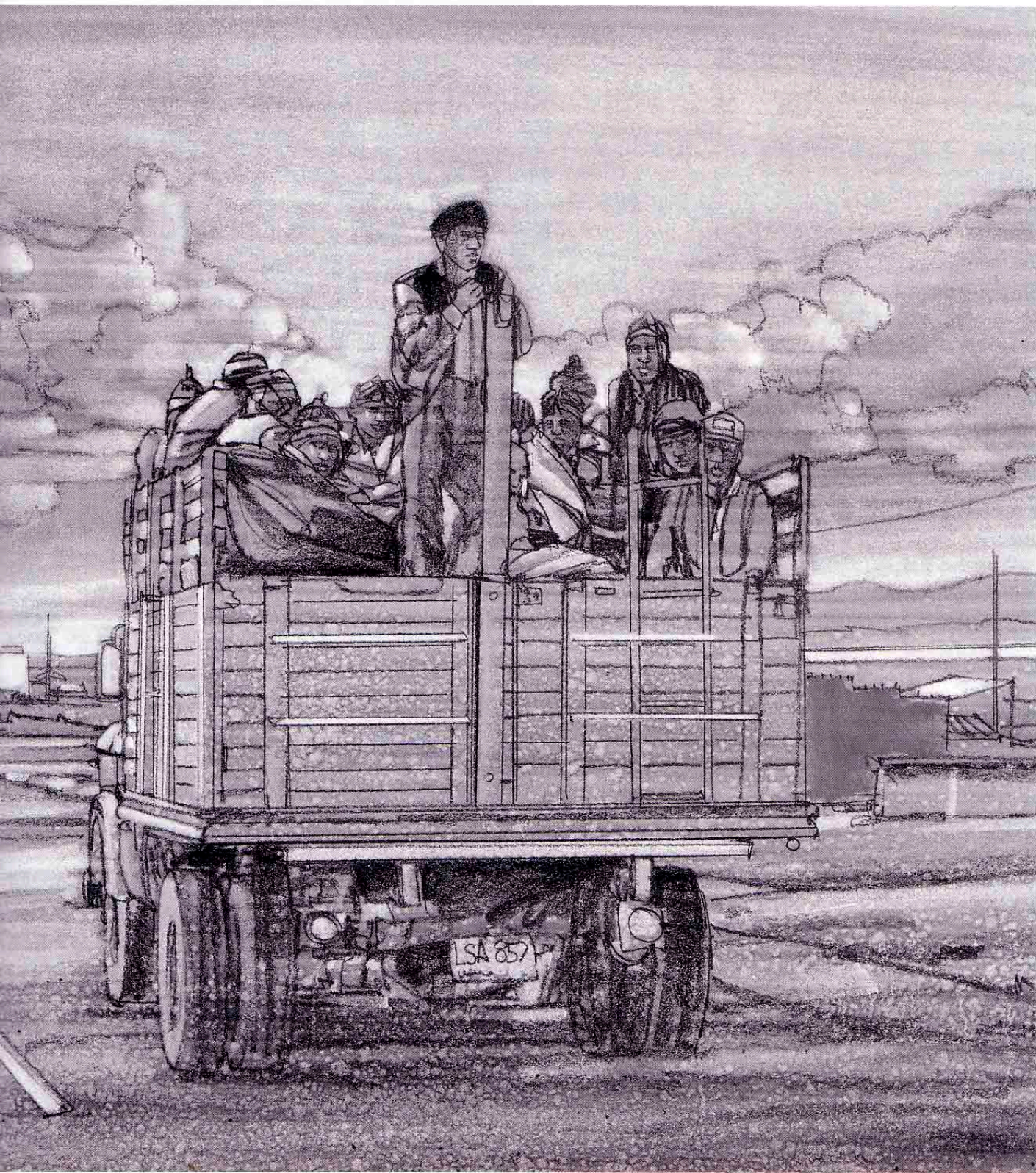
指導者会が始まる前、私はステーキ部センターの前に立ち、到着する兄弟たちにあいさつをしていました。すると、ひとりの年配の兄弟が通訳を通して、自分はラパスから遠く離れた所に住んでいると言いました。見ると、彼の服は胸から下の部分が変色しています。上の方は白いのですが、下の方は赤茶けた色に染まっているのです。

やがて、その兄弟と3人のメルキゼデク神権者が8時間以上もかけて集会へやって来たことを知りました。しかも道のりの大部分を歩いて来たのです。途中、ふたつの川を歩いて渡り、赤茶色の水に胸まで漬かったのです。ラパスへ向かう幹線道路に着くと、トラックを止めて乗せてもらい、4人の兄弟たちはステーキ部センターへ着くまでの2時間、トラックの荷台に立ち通しでした。

人がそこまで深い献身と信仰、勇気を持ち得るということが私にはとても信じられませんでした。この愛すべき兄弟を心を入れてねぎらうと、彼はこのように言いました。「バラード兄弟、あなたは主イエス・キリストの

忠実な教会員たちは、地区大会に出席するために、長い距離もいとわずに献身と勇気を示した。





ペルーのある姉妹は、時間的、経済的また距離的な問題を乗り越え、リマ神殿で召しを果たすために献身的な努力をしている。

使徒です。主が私に教会の神権指導者として行なうように望まれることをあなたから聞くためでしたら、道のりがどんなに長かろうと、川がいくつあろうと構いません。」

私はこの返事を聞いて涙が込み上げてきました。私たちは神の神権者という特別な兄弟同士として互いに抱き合いました。彼とその同行の兄弟たちは何も食べておらず、またその晩泊まる所もありませんでした。そこで親切なラパスの聖徒たちが、大会の開かれている週末の間、彼らの世話をしたのでした。

献身的な奉仕をしているのはこの兄弟たちだけではありません。リマ神殿で「特別な代理人」として働くように監督から召されたペルーのある姉妹のことが思い出されます。彼女は朝3時に起き、4時に家を出て、長い時間をかけて神殿へ向かいます。途中3台のバスを乗り継がなければならず、バスの運賃は彼女の少ない収入の3分の1以上にもなります。リマでバスのストライキがあった時にも彼女はやって来ました。神殿の方へ向かうトラックの荷台に乗ってきたこともありました。実にすばらしい奉仕への献身と言えましょう。

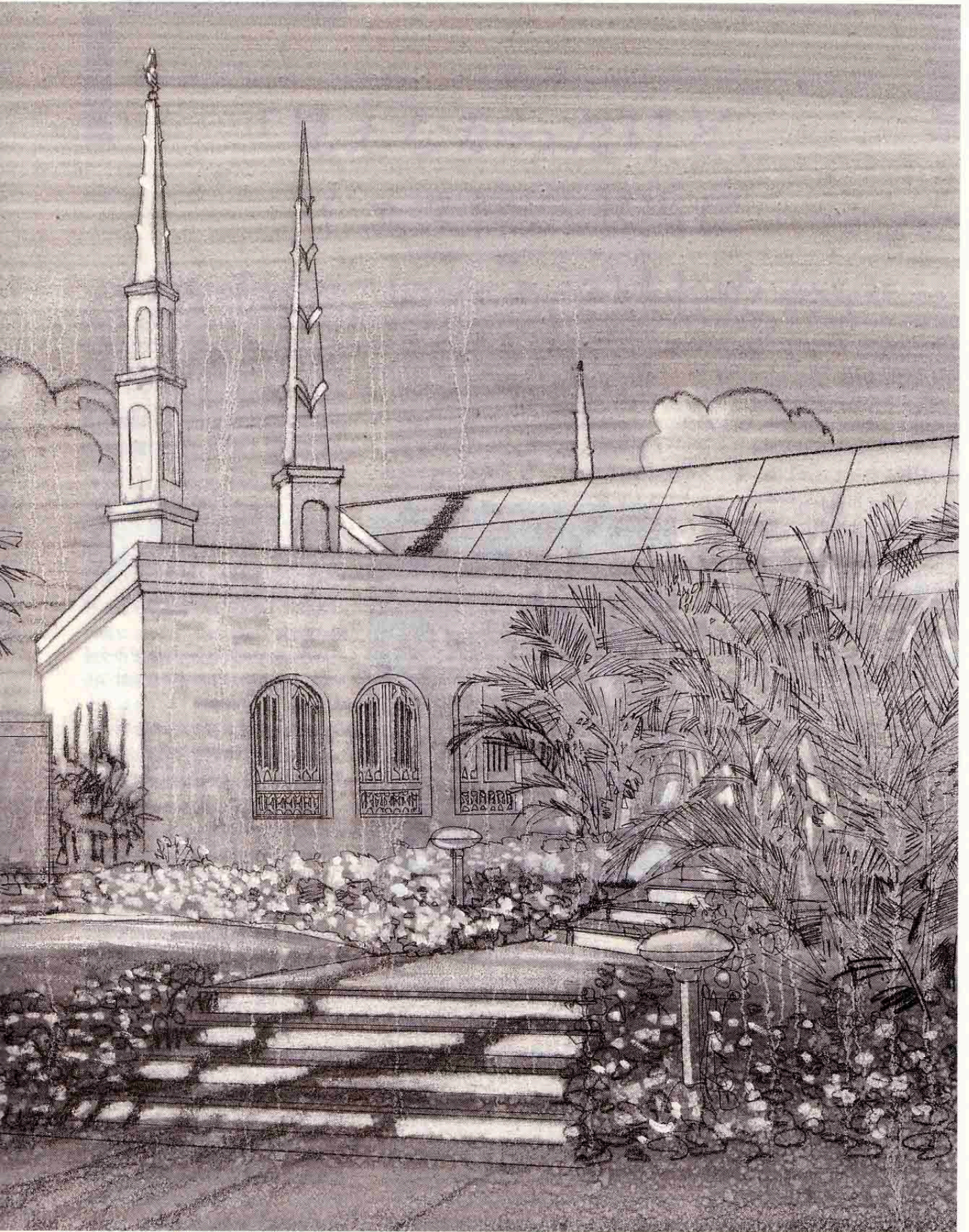
最近私は、ユタ州プロボの宣教師訓練センターにいる立派な若者から手紙を受け取りました。以下の話は彼の献身振りを物語っています。

「私の人生で、水泳ほど大事なことはそうはありません。家族は皆、私が上達できるよう大変な犠牲を払ってくれました。父は私と共に4時に起床し、練習場まで車で送ってくれました。そして午後には両親が迎えに来て、家まで乗せて帰ってくれました。全国のあちこちで開かれる選手権大会に出場するにはとてもお金がかかりましたが、両親はいつも何とかやり繰りして、私が出場できるように援助してくれました。

私はかなり上達し、オリンピックの予選に出場する資格を得ました。アリゾナ大学の水泳チームのメンバーとして、全国でもトップクラスの水泳選手になれたのです。しかし、同時に私は伝道に出ることを考えていました。

大学チームのメンバーとして泳げるのはあと1年しかありませんでした。大学に残れば、チームのキャプテン





となり、学費を全額支給してくれる奨学金をもらえることになっていました。しかし私はオリンピック予選に備えて毎日練習しながらも、伝道の申請書を出すことを決心したのです。

間もなく私はテキサス州オースティンで行なわれた予選に出場しました。私のチームは最良のチームに数えられ、メンバーのうち8人がオリンピックに出場できるだけの記録を持っていました。ところが私は調子が悪く、オリンピック出場の資格を得ることはできませんでした。オリンピック出場のために、私はこれまで人生のすべてをかけてきたのです。家族も私の晴れ姿を見るために、はるばる遠くから来ていました。にもかかわらず、目標を達成することはできませんでした。私はすぐにもプールに飛び込んで、次のオリンピックに備えて練習を始めたいと思いました。

その時、伝道の申請書を送ったことを思い出しました。しかし、私に大学の水泳チームを落伍者としてやめることができるでしょうか。私のコーチは、来年はきっと記録を破ることができる、でも伝道に出るなら、これまで人生のすべてをかけてきたことがみな無駄になってしまおう、と言いました。

次の週は苦悶の1週間でした。どちらへ進むべきかわからずに悩みました。教会の指導者に相談し、何度も何度も祈りました。そしてとうとう、今は伝道に出る時だという結論に達しました。みたまに逆らうことはできません。

今、私は伝道に出ています。この道を選んだことを後悔していませんし、むしろ以前よりも幸せを感じています。確かにつらい思いをしましたが、キリストのために自分の命を失うならば、それを見いだすことができるのです。何かを行なう力がありながら、それに取り組まないというのがどういうことか私は知っています。それは苦い経験です。私は裁きの日に神のみ前に立つ時、そのような思いをしたくありません。私たちは、どのようなときでも神にすべてを捧げる必要があるのです。

決心は、今しなくてはなりません。私は毎朝起きてから、練習に行くか眠るかを決めたものではありません。す

でに決心していたので、朝になると選択の余地はなかったのです。一度決意したことは守らなくてはなりません。しかし完全に守るためには、主の助けが必要です。約束をした時の気持ちが薄らいってしまった後もその約束を守り続けていくには、克己心と献身が必要です。」

私たちは皆人生で困難な問題に直面します。比較的豊かな生活をしている人の問題は、貧しい環境に置かれた人の問題とは異なっているでしょう。しかし、人は皆、決意することができます。そして、いったん決心したことは実行しなくてはなりません。神権会に出席するために8時間歩き、晴れ着を着て川を歩いて渡ろうとも、あるいは伝道に出るために一生をかけた目標をあきらめようとも、主はそのような献身を示す人を見ておられ、祝福してくださいませ。

ヤコブの手紙第2章14節から26節には、信仰があることを証明するためには行ないによって示さなくてはならないと教えられています。

「ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いている場合、あなたがたのうち、だれかが、『安らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい』と言うだけで、そのからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとしたら、なんの役に立つか。信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。」(15-17節)

皆さんは自分が信じていることのために犠牲を払うべき時がやって来たら、その犠牲を払うだけの信仰を持てるのでしょうか。主が求められることを行なおうという決意をすでにしているのでしょうか。自分にとって都合が悪かったり、楽しいことではなかったりしても、その決意を貫くだけの克己心を持っているのでしょうか。主が、あるいは主の使いが求めることを行なうと、今、主に約束するよう、皆さん一人一人にお勧めいたします。その犠牲は大きいときも小さいときもあるでしょう。どちらの場合にあっても、皆さんが信仰を行ないに示す力と誠実さを持てますように。そして全力を尽くして主に仕えたことを思い起こしながら、いつの日か主のみ前に答なく立てるように願っています。□

慈善奉仕の実を共に味わう

1992年、私たちは1年間にわたって扶助協会150周年を記念し、世界中の扶助協会の姉妹たちが奉仕を通してこの行事を祝っています。ノーヴーで開かれた最初の扶助協会では、姉妹たちはほかの人々の必要を見だし、自分たちにできることをしました。それは、1袋の小麦粉や1枚の布、1本の針と糸を与えることであったり、何時間かの労働を提供することであったりしましたが、姉妹たちの心の中は常に互いの幸福を願う気持ちに満ちていました。今日も姉妹たちはいろいろな方法で人々を助けています。

中央扶助協会会長のイレイン・L・ジャック姉妹はこのように述べています。「愛とは奉仕を行なうことですが、それだけではありません。それは心の状態です。愛は私たちの生活になくしてはならないものですが、愛の力をどのように伸ばし、実行するかは人それぞれの生活が異なるように、それぞれ異なっています。」

奉仕のプログラムとしては、視力の弱い人のために不用品の眼鏡を集める、高齢者のために窓や床の掃除をする、病気や老齢で外出できない人のために本を読む、孤児院の子供たちを元気づける、などいろいろな方法がありますが、いずれの奉仕も豊かな実を結んでいます。

パウロはこのように教えています。「豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。……神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いおぎに富ませる力のあるかたなのである。」(IIコリント9：6、8)

教会や地域社会で人々に奉仕するにはどうしたらよいでしょうか。



ILLUSTRATED BY DOUG FAKKAL

「わたしたちは、善を行うことに、
うみ疲れてはならない。」

オーストラリアのシドニーに住むマリリン・ジョーンズ姉妹は、奉仕したいという気持ちを最後まで失うことなく、初めは不可能と思われていた仕事を成し遂げました。体が不自由な息子を持つジョーンズ姉妹は、近くのレクリエーションセンターが利用できれば、息子にとっても障害を持つほかの人たちにとっても役立つと考えました。しかし、それには地域の建築の基準を変更してもらう必要がありました。政府の援助をもらうために、地域の人々の支持を求め、数え切れないほどたくさん書類を書きました。ほかの人を説得して協力してもらうために何時間も話し合いました。

8年後、ジョーンズ姉妹とその隣人たちは慈善奉仕の働きの成果を目の当たりにすることができました。彼らが運営する地域のレクリエーションプログラムは、体の不自由な多くの子供たちに祝福をもたらしています。

使徒パウロは、種まきや収穫と同じように、奉仕には忍耐強さが必要であると、次のように教えています。「わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。ためまないでいると、時が来れば刈り取るようになる。」(ガラテヤ6：9)いくら良い種をまいても、長い時間をかけて世話をしなければ、収穫を得ることはできないのです。

人々へ奉仕する場合には、収穫は必ず2倍になります。まず第1に、奉仕を受ける人を祝福し、第2に、奉仕をする人自身が主の助けを受けるという祝福にあずかるのです。

将来に備えて慎重な計画を立てることや最後まで耐え忍ぶことはどのように役立ちますか。

絶えることのない奉仕

ジャック姉妹はこのように述べています。「人々に対して奉仕の手を差し伸べない口実はいくらでもあります。私たちはほとんど皆自分のことに追われています。ほかの人の生活には干渉したくないと思うことでしょう。苦しんでいる人々から離れ、自分だけの殻に閉じこもっていた方が心地よいことがあります。けれども、みずから行動を起こすなら、私たちも周りの人々も祝福されるのです。」

扶助協会の皆さん、どうか慈善奉仕の精神をもって毎日生活し、「ただ聞くだけの者」ではなく、「御言みことばを行う人」(ヤコブ1：22)になるよう努めてください。

周りにいる人々に奉仕すると、私たちはどのような祝福が得られるでしょうか。奉仕を受ける人々はどのような祝福が得られるでしょうか。□

私の人生を変えた書物

ラリー・ガート

モルモン経の証を分かち合う教会員たち

「人生は、自分の力ではどうにもならないと感じたことはありませんか。」ワシントン州アーリントンに住むグエン・レグラ兄弟はこのように問いかけます。「そんなときは、ただただ心配するばかりです。数年前の私の状態がちょうどそうでした。将来についていつも心配し、不安な気持ちを抱いていたのです。」

ある時私はモルモン経を読んでいて、ニューファイ第二書第4章27節が目にとまりました。『またどうして私の肉体のために罪に負けてよいだろうか。どうして誘惑に負け、悪魔が私の心の中に入ってその平安を破り、私を苦しめるに任せてよいだろうか。また何故敵のために怒りを抱こうか。』いはずまでさえ、この言葉ほど激しく私の心を突き通すことはできなかつたでしょう。心配や不安は悪魔の誘惑で、私の平安を破っているのだということに気がつきました。この聖句によって環境が変わったということはありませんが、私自身の態度は変わりました。自分の将来について、天父に信頼を置くことによって心の平安を得ることができました。」

これは教会の機関誌編集室へ何百と寄せられる、モルモン経を読んだときの経験に関する教会員からの手紙のひとつです。以下に、そのうちのいくつかを紹介しましょう。

「私は主を知っています。」

「私にはイエス・キリストについての個人的な第2の証が必要でした。」ペンシルベニア州ダンビルに住むジョディー・バー姉妹は語っています。「キリストを知りたかつたのです。キリストの真実性や贖いについて疑い

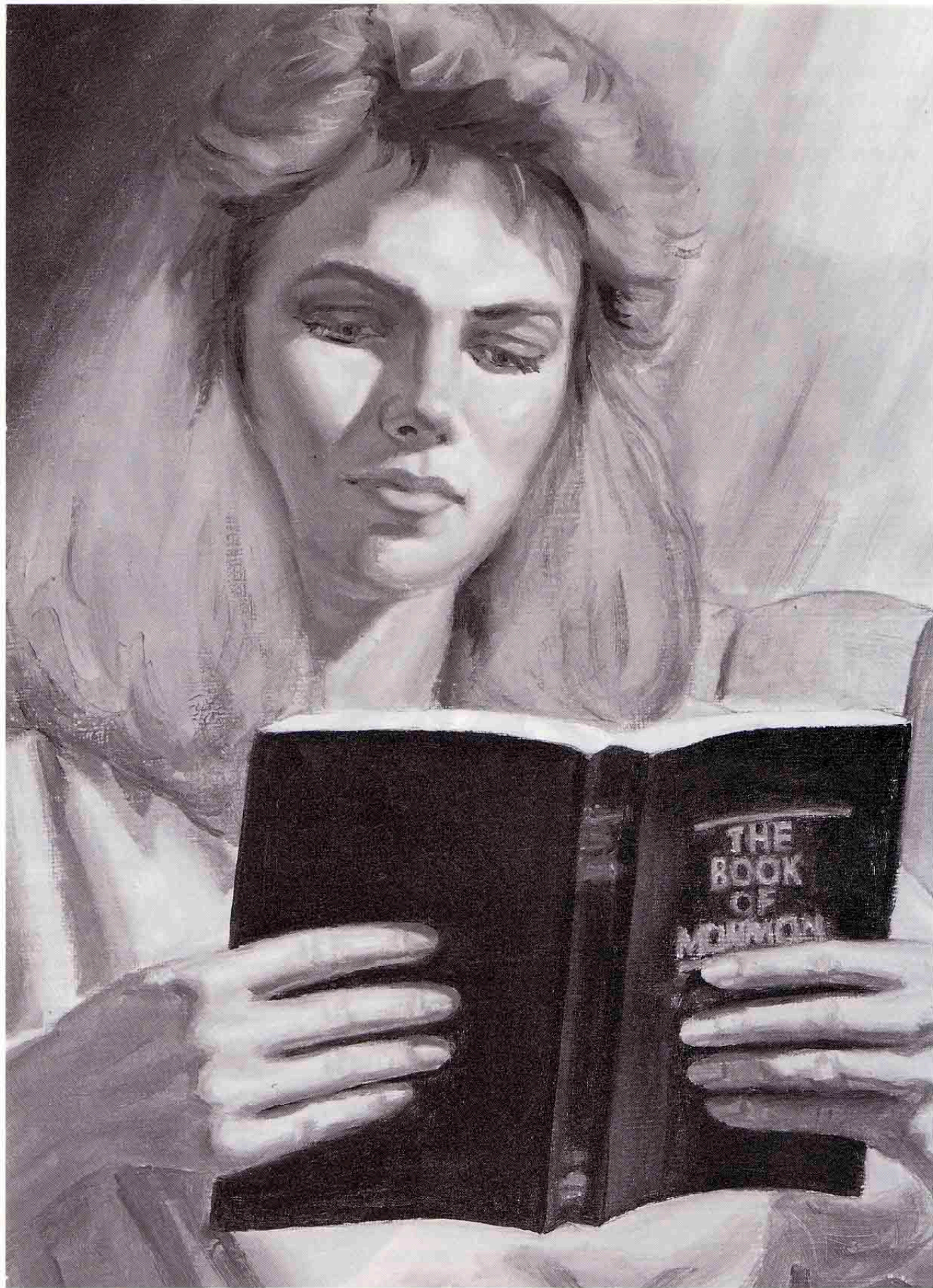
を持ってはいませんでした。人として、また愛にあふれた神としてのキリストについてもっとよく知りたかつたのです。モルモン経を読み返した時、特定の聖句や物語の中には求めていたものは見いだせませんでした。しかし、モルモン経の様々な背景の中で、キリストについて学んでいくにつれて、私のキリストについての知識は少しずつ築かれていきました。

聖餐会で証を述べた時、みたまが私の心に満ちあふれ、それまで求め続けていたイエス・キリストに対する第2の証が得られたと感じました。集会の後、ひとつの言葉が何度も繰り返して心の中に浮かんできました。『私は主を知っています。私は主を知っています。』これは私にとってかけがえのない証です。あの日私に与えられたものは、まさに私が探し求めていたものでした。それはモルモン経を読むことによって得られたのです。」

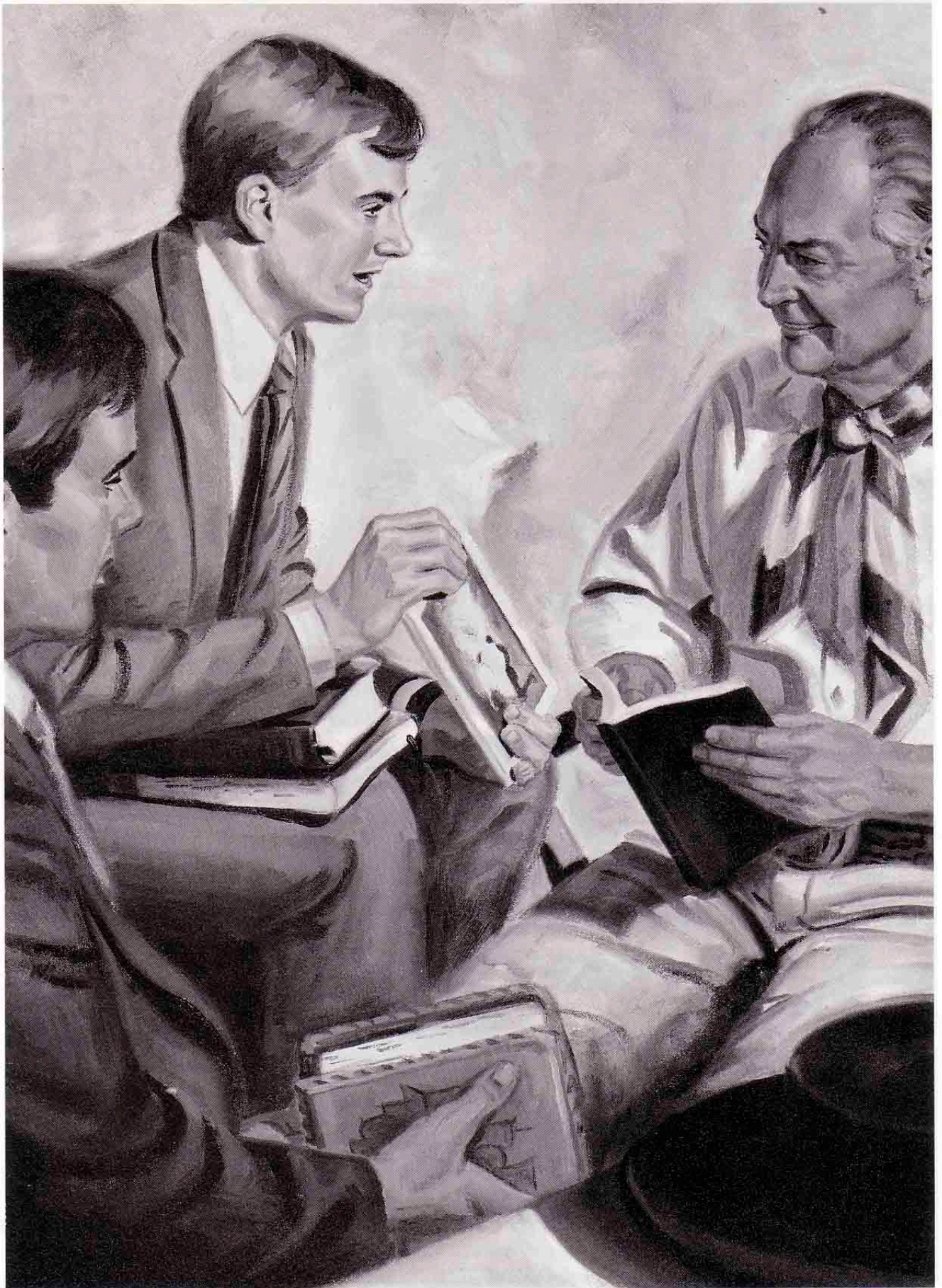
モルモン経がもたらした変化

「真理を探し求めていたころ、私は黄色くかび臭くなつた1冊の古いモルモン経を見つけました。長いことだれの手にも触れられなかつたように、表紙は固くなっていました」とニューヨーク州サウスグレンズフォールズに住むジャネット・スピーア姉妹は語っています。「手に取ってみると、たとえようもない喜びと平安が心に広がりました。その日からモルモン経を読み始めました。霊的な糧に心が飢えていた私は、モルモン経の言葉をじっくりと味わい始めたのです。」

アルマ書第13章27節を読んでみると、その言葉は私の胸に突き刺さってきました。『自分の罪をすて、悔改め



ILLUSTRATED BY ROBERT MCKAY



モルモン経の「確かな証」を求めてしばしば祈りましたが、同僚と共にあの老紳士を教えるまで、思ったような結果は得られませんでした。

の時を延ばさず……。』私は思わずひざまずいて一心に祈りました。聖霊が私の心にこうささやきました。『今までの旅は終わりました。新しい旅を始めなさい。』

私は宣教師に福音を教えてもらえるように手配しました。本当に素晴らしい経験でした。あのような喜びは、それまで感じたことがありませんでした。バプテスマを受けた日から今まで、私はモルモン経を片時も離れたことがありません。モルモン経は私を励まし、霊を奮い立たせ、教え導いてくれます。そして単なる処世術ではなく、真の生き方を教えてくれました。まさにモルモン経は私に変化をもたらしたのです。』

「読んで聞かせてくれないか」

ある土曜日の朝、アリゾナ州チャンドラーに住むボブ・クレイマー、ポーラ・クレイマー夫妻は、家の外で暖かな太陽の光を浴びながら、子供たちが裏庭で遊ぶのを眺めていました。最近再び教会に活発に集うようになったポーラは、モルモン経を出して読み始めました。教会員でないボブが、何を読んでいるのかと尋ねると、ポーラは答えました。

「モルモン経よ。」

「読んで聞かせてくれないか」とボブは何気なく言いました。

ポーラはこのボブの言葉に驚きました。彼女の思い出す限り、13年間の結婚生活の間で、声を出して夫に本を読んだことなど一度もなかったからです。やや躊躇しながらも、心の中で祈りながら、ポーラは読み始めました。「私すなわちニーファイは善い父母から生れたので……。」（I ニーファイ 1：1）その日彼女は2時間読み続け、以来ときどきボブにモルモン経を読んで聞かせています。

「何か大切なことがあの朝起こったように思います」とポーラは言います。「ボブと私は教会について話すようになりました。このような新しい話題の中で、ボブは教会が私の生活にどんな影響を与えているか、わかり始めています。私も夫に批判的になるのではなく、彼の助けに感謝するようになりました。最近私は、アリゾナ神殿でエンダウメントを受けましたが、ボブはそのために精一杯協力してくれました。

今モルモン経を読むと、これが単なる紙の上に書かれた言葉ではないことがわかります。モルモン経が持つたまの力は、愛する人にその中に書かれたメッセージを読んで聞かせることによって、私の人生に奇跡をもたらしてくれました。」

「私を慰めてくれました」

「クリスマスまであと2週間と迫っていました。こんな時期に、8歳になる息子を最近亡くした悲しみにどうやって耐えることができるでしょうか」とユタ州ドレーパーに住むリン・マグイアー姉妹は語ります。「ある晩のこと、みんなが寝静まってから私はベッドを出て居間に行き、クリスマスツリーの傍らに座りました。そしてこのクリスマスを、そしてこれからの年月をどのように耐えたらいいのか、天父に尋ねました。祈りながら私は、慰めてくれる古い友達のことを思い出しました。モルモン経です。私は手に取って読み始めました。どこを読んだのか覚えていませんが、慰めてくれたことだけは覚えています。読んでいくうちに涙があふれ、平安をはっきりと覚えました。自分の重荷を友達の肩の上に下ろしたような気持ちでした。」

「確かな知識が欲しかったのです」

アイダホ州シェリー出身のサム・ウォーカー長老が、アルゼンチンに伝道に出て2週間ほどたった時のことです。彼はモルモン経のモロナイ書第10章4節に書かれているチャレンジを試してみようと決心しました。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」

同僚が寝つくのを待って、彼はひとりで祈るためにバスルームに入っていました。

「バスルームには屋根がなかったので、パジャマの上にオーバーを羽織って行きました」とウォーカー長老は言います。「湿った硬い床の上にひざまずいたのを今でも覚えています。祈りながら私は、熱心にあの静かな細い声に耳を傾けました。そしてこれ以上ひざをついていられなくなると、私は祈りを終え、ベッドに戻りました。」

ウォーカー長老はモルモン経に対する「確かな証」を求めて祈り続けましたが、思ったような結果は得られませんでした。ある日、彼は同僚と一緒にある老紳士を教

えていました。

ウォーカー長老はその時のことをこのように回想しています。「同僚がこの老紳士にモルモン経について教えると、この上もなく清らかなみたまが部屋の中に満ち始めました。同僚は突然話をやめて私の方を見ました。モルモン経が真実であることを私が証する番だったのです。どんな言葉だったかははっきり覚えていませんが、その時私に証をしたみたまによる温かい気持ちは覚えています。モルモン経は真実であると求道者に証をするにつれ、みたまをさらに強く感じるようになりました。それまで求めていた、モルモン経が真実であるという確かな知識がついに得られたのです。」

「怒鳴らないように努力しました」

「6人兄弟の長女として、弟や妹たちの面倒を見なくてはいけないことがよくありました」とテキサス州フォートワースのルース・アン・ウィールライト姉妹は言います。「穏やかに見守るなどというのは苦手で、よく怒鳴っていました。友人にまでそうしていました。両親は大声を出している私に不満を抱いていましたし、私自身もうんざりしていました。怒鳴らないように努力はしましたが、だれかに怒鳴らずには自分自身がつぶれてしまいそうなきがよくありました。」

ウィールライト姉妹はブリガム・ヤング大学で宗教学の時間に、教師から毎日聖典を30分間読むようにというチャレンジを受けました。それもただ読むのではなく、聖典の言葉をよく味わうようにという課題でした。熱心な読書家だった彼女は、そのチャレンジを容易に受け入れました。

「夏休みに家に帰った時も、平日には引き続き聖典を読みました。でも土曜日と日曜日はさぼってしまいました。するとどうでしょう、私はまた弟や妹たちに向かって怒鳴り始めてしまいました。ショックでした。私はすぐに30分間モルモン経を読みました。するとそれから後の1日は穏やかに過ぎました。夏休みの間、怒鳴ることで欲求不満を解消しようとする私の衝動は次第に薄れ、家庭生活は以前よりもずっと穏やかになりました。モルモン経の助けなしには、怒鳴る癖を克服することはできなかったでしょう。」

「子供のころから悪い夢に悩まされてきました」

「恐怖におびえて夜中に目を覚まし、眠れないことが週に2、3回もありました。そうするうちに眠ること自体を恐れるようになってしまったのです」と、ユタ州サ

ウスジョーダンのジャン・サラ姉妹は言います。「友人たちが私を助けようとして、いろいろな提案をしてくれましたが、どれひとつうまくいきませんでした。毎晩、よく眠れるようにと天父に祈るのですが、結局いつも恐怖で目が覚めるのです。自分はどうかしてしまったのではないかと思うようにさえなりました。」

ある晩のこと、私はひざまずいて祈りながら、眠れるように助けてくださいとお願いするのではなく、悪い夢から逃れるために自分は何ができるかと尋ねました。すると、寝る前に聖典を読むようにという強い気持ちを感じました。私はモルモン経を出して、アルマ書第37章37節を開きました。『汝のする一切の働きについて主のみこころを伺え。……眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝る時には自分の身を主に任せて寝よ。』その晩から、私は朝ではなく、寝る前に聖典を読むことにしました。モルモン経について思いをはせるときのあの穏やかな気持ちによって、私は眠ることができるようになり、悪い夢を見なくなったのです。」

感謝の祈り

「ある日、私が祈っていると、モルモン経を書いた予言者たちに対する感謝を天父に捧げるようにというみたまのささやきを感じました」と語るのは、カリフォルニア州キャステイクに住むルース・ローエス姉妹です。「祈りながら、喜び、平安、感謝、謙遜といった気持ちが心に満ちて、そういった気持ちをいつまでも失いたくないと思ったことがないでしょうか。あまりのすばらしい祈りに、その源は何だろうと思い巡らしたことや、天父を間近に感じて、自分の霊が喜びの叫びを上げるのを感じたことはないでしょうか。私がモルモン経の予言者たちに対する感謝を捧げた時、まさにそのような気持ちを感じたのです。」

多くの教会員が、モルモン経を読むことによって祝福を刈り取っていることが容易に理解できます。エズラ・タフト・ベンソン大管長は1986年の総大会の時に次のように約束しました。

「モルモン経がさらによく理解できるように祝福します。これからモルモン経を毎日ひもとき、そこに書かれている教えに従って生きるなら、神がシオンの子らと教会の上に、かつてない祝福を注いでくださるということをお約束いたします。」(『神聖な務め』『聖徒の道』1986年7月号、p.78)□

モルモン経を学ぶ様々な方法

編集室に寄せられる多くの手紙から、モルモン経を学ぶには様々な方法があることがわかります。

大切な原則を書き出す

「モルモン経から何か具体的なものを得たいと思っていました」とユタ州プロボのリン・フォード姉妹は述べています。「そこでノートを用意して、モルモン経から学んだ大切な原則と、それを自分自身にどう応用できるかを書き出しました。今では落胆したときなど、ノートをめくっていると励ましと導きを見いだすことができます。」

祈りを加える

「モルモン経を読みながら、理解しにくい部分に出くわすことがよくあります」と語るのは、バージニア州ラドフォードに住むロバート・ターナー兄弟です。「そんなときは、読むのをやめて、平安な気持ちを感じるまで祈るようにしました。それが習慣になり、ときにはほとんど1ページごとに祈っているようなこともよくあります。その結果が、今私の持っているモルモン経に対する強い証なのです。」

日記をつける

「私は長い間日記をつけてきました」とコロラド州ラブランドに住むミッシェル・サンドバーグ姉妹は述べています。「でもそれは、俗世にかかわる出来事や事実を並べた歴史であるニーファイの大版のようなものでした。モルモン経の中でニーファイが記録を書き残していく様子について読むと、私も自分の人生について、信仰に基づいた神聖な記録を書きたいと思うようになりました。自分自身の小版を作って、父なる神とイエス・キリストのことや、私たちに対する神と御子の愛について証を残そうと決心しました。」

1日最低15秒

「扶助協会で、1カ月間毎日、最低15秒モルモン経を読むようにというチャレンジが与えられた時、それを受け入れる必要があると感じました。忙しさに変わりはありませんでしたが、私でも15秒間ぐらいなら聖典を読めました。」ユタ州サンディーのキャロル・ローランジ姉妹はこう語ります。「1カ月がたつうちには、モルモン経を読む習慣がすっかり身について、いつも15秒よりはるかに多くの時間を費やしていました。」

モルモン経を読み返す

「暗い人生に光を求めてモルモン経を読み続け、3度目にしてやっとその光を見いだしました」とアイダホ州レックスバーグに住むマリアン・ヘイズ姉妹は語っています。「子供の昼寝の時間に毎日読んで、1年半かかりました。それでも私はモルモン経を読み終え、平和の君である救い主の光を見いだしたのです。」□

みたまに耳を傾ける

「モルモン経の中の細かいことを覚えようとする代わりに、読みながらみたまのささやきに耳を傾けることに集中するようにしました」とペンシルベニア州カレッジビルに住むオーウェナ・ネーギ姉妹は語ります。「聖典を開いて読むというのは簡単な行為ですが、主に向かって、私はあなたから学びたいのですと言うようなものです。私は、ニーファイ、モーサヤ、ベンジャミン王といった人物から多くのことを学びながらも、同時に、行間に隠された力と導きの尽きることのない源も見いだすことができました。」



PHOTOGRAPH BY JOHN LUNE

ファン・クンオク

.....
韓国の子供たちを愛し続けて



上——寄付されたクリスマスのプレゼントを受け取る孤児院の少女たち。
右——1990年、アメリカ在住の子供たちと
ソルトレークシティを訪れたファン姉妹。
左から、スゼット(スーユン)・マーブル、ジニー・ロビー、ユン・ジュ・キム。

シャーリーン・ミック・サンダース

韓国のソウルの街を、30人のおびえた少女たちがとぼとぼ歩いていきます。わずかばかりの身の回りの品をスカーフに包んだこの子供たちは、ファン・クンオクの家に向かっているのです。家はとてもそれだけの人数が住めるほど広くはありません。また、今までいた孤児院の保護を離れて、これから先どうなるのかという不安もありました。しかし彼女たちは、自分たちが母親のように慕い信頼するこの女性、ファン・クンオクに従っていきたくと望んだのです。また模範によって彼女が導いてくれた教会に集いたいとも願っていました。その教会こそ、末日聖徒イエス・キリスト教会でした。

1969年11月のその夜が、ファン姉妹の「テンダー・アップルズ・ホーム」の始まりだったのです。慈善事業を生涯の使命としていた彼女にとって、またひとつ仕事が始まったのでした。

奉仕の夢

ファン姉妹の奉仕の夢はそれよりずっと以前、韓国が日本に占領されていた少女時代に端を発しています。長老派教会の熱心な信者だった彼女は、昼は畑で働き、夜になるといつも、将来必ず教育を受けて神様のために働





左——コンサートが終わって子供たちにおやつを配るファン姉妹(左端)
右——子供たちと一緒に写っている「おばあさん」は、当時テnder・アップルズ・ホームの副院長を務めていた。



ける日が来るように、と祈っていました。医療体制の不備から命を落とす人が多かった時代でした。彼女は医学の道に進んで医者になりたいと思いましたが、まだ女性の地位の低かった韓国社会では、実現不可能な目標のように思えました。

しばらくして、彼女の祈りはこたえられました。戦^{ジェ}争^{リユン}とソウルで、学費を稼ぐために働きながら、中学に通える道が開けたのです。彼女は勉学に励み、優秀な成績で卒業すると看護学校に進みました。

しかしそのころ、韓国は大変な時代でした。人々は貧困に苦しみ、母国語である韓国語を話すことも、伝統的な習慣に従うことも許されませんでした。ファン姉妹自身、日本の天皇を崇拜しないという理由で、退学処分を受けてしまいました。その時彼女と数人の友人たちは、二度と同じような迫害に苦しむ人たちが出ないようにしようと、それぞれの生涯を捧げる誓いを立てました。韓国独立後、彼女たちはその誓いを度重なる戦争で苦しむ人々、特に子供たちの世話に向けることにしました。

1945年8月15日、連合軍が韓国を解放した日のことを、ファン姉妹はよく覚えています。「長い間待ち望み、そのために戦ってきた自由に、生きとし生けるもの、草木、山々に至るまでが喜んでいるかのように思えました。」しかし、その喜びも長くは続きませんでした。国が二分されてしまったのです。北は共産党に支配されたため、多くの人は南に逃れようとしてきました。南と北が分断される直前に、ファン姉妹は辛くも最後の汽車で北からの脱出に成功しました。以来、家族には会っていません。彼女は直ちに難民キャンプで子供たちを教え、飢えと寒さに苦しむ人々を助けて働き始めました。

慈悲の業

ファン姉妹はこう言います。「生涯の仕事と決めた奉仕について神に祈りました。私には十分な能力も技能も力もなかったのですが、できるだけ多くの、貧困に苦しむ人々を助けたいと強く望んでいたのです。そのためには、この世的な持ち物を犠牲にし、いつも霊的な強さを培っていく必要があることを知っていました。」

難民キャンプで働くうちに、ファン姉妹の仕事は看護から教育に変わりました。6年たった1958年11月のこと、貧しい人々を助けたいという希望を実現するために、もっと教育を受ける必要を感じたファン姉妹は、彼女が集っていた教会の牧師の勧めに従って、カリフォルニア州立大学バークレー校への交換留学に志願しました。無事留学が認められた彼女は、教職で蓄えたお金を手に、1年間の有給休暇を取って、韓国を後にしたのでした。

アメリカに到着後間もなく、ファン・クンオク姉妹は、夏休みを利用してバークレーで仕事をしていたブリガム・ヤング大学の韓国人の学生ふたりと知り合いました。ふたりにユタ州プロボに来るよう誘われた彼女は、1959年の秋にブリガム・ヤング大学のキャンパスを訪れました。山々の美しさに心を奪われ、末日聖徒の信仰にも感銘を受けたファン姉妹は、結局3年間ブリガム・ヤング大学で社会福祉を学んで過ごすことになったのです。そして1962年6月、韓国に戻ったファン姉妹は宣教師を探し出し、バプテスマを受けました。

1965年、ファン姉妹はソン・ジユク孤児院の院長に就任しました。11歳から14歳までの3年間をその孤児院で暮らしたジニー・ロビーはファン姉妹のことをよく覚えています。「いつも忙しそうに走り回りながら、笑顔を



左——ふたりのホーム職員と年少の子供たち
 右——前の女の子、シンディ・ニールソン・ディクソンは成人して、現在ユタ州に住んでいる。

決して絶やさな人でした。私たちの名前はもちろん、それぞれが何をしているかもよく知っていましたし、一人一人の状況についてもよく話を聞いてくれました。」

希望の歌

ファン姉妹が孤児院を任されてからまだ2年とたたないころ、スタン・ブロンソンが孤児院にやって来ました。スタンはユタ州ブランディングの出身で、ソウルのアメリカ陸軍第8駐屯地に赴任してきたばかりでした。公務外の自由時間を有意義に過ごしたいと思っていた彼は、子供たちを助けようと決心し、近くの孤児院を探していました。そんな時に教会員が、ファン姉妹のことを教えてくれたのです。

ファン姉妹に初めて会った時、身長193センチもあるスタンは、ファン姉妹の小さな体にあふれる威厳と自信に驚きました。しかし、それよりもっと驚いたのは、彼女の人に与える心地よい雰囲気でした。スタンはこのように語っています。「彼女は献身的でやさしく、しかも真心から人を思いやることのできる人なのです。」

スタンは自分がギターを弾けること、ときどき来て子供たちに歌を教えたいということを話しました。「数日後、私はかわいそうな子供たちを元気づけようと意気揚々と出かけて行ったんです。ところがファン姉妹が『ブロンソン兄弟、あなたの歌の前に子供たちがご披露したいものがあるんです』と言うんです。それから30分間、世にもすばらしい音楽を聞かされた私は、とても謙遜な気持ちになっていたのです。」

スタンは女の子たちを合唱団として組織し、新しい歌も教えました。『小さな川が』（「子供の歌」G-24）は彼

女たちのお気に入りのひとつでした。ファン姉妹とスタンは子供たちに、だれでも人と分かち合える賜が必ずあると教えました。大きな足のせいでホームの女の子たちに「大靴おじさん」と呼ばれていたスタンと子供たちは、アメリカ軍の基地で歌い始めました。その秋には、「大靴おじさんとソン・ジュク院の少女たち」という題名のレコードアルバムを出すに至ったのです。

「グループで歌い始めて、子供たちは本当に元気づけられました」とスタンは当時を思い出して言います。「『スレギ(ごみ)』と呼ばれる身から一躍有名人になったのですからね。レコードもあるし、全国放送のテレビに出演して歌うし、アメリカ大使や韓国の大統領の注意まで引くようになったんですよ。」

ファン姉妹もグループの成功を望んでいました。姉妹はその収入で彼女たちのために学校を建て、授業料を払えないほかの貧しい子供たちにも、その門を解放したかったのです。スタンはファン姉妹のことを「PRの天才」だったと言います。

「たとえばレコードが発売になった時のことです。ファン姉妹はレコードの発売記念パーティを高校で開くというのです。その上、韓国の朴大統領、アメリカのウィリアム・J・ポーター大使と国連軍総司令官チャールズ・H・ボーンスティール將軍を招待したというではありませんか。『どうやってそんな大物に来てもらうのですか』と私が尋ねたんです。彼女は笑って言いましたよ。『あのね、朴大統領への招待状にはポーター大使とボーンスティール將軍も招待されていると書いたのよ。ボーンスティール將軍への招待状には朴大統領とポーター大使も招かれていると書いたし、ポーター大使へはほかのふたりも招待されているって書いたの。』結局、大使夫





左—アメリカ兵スタン・ブロンソンは子供たちを組織して80人の合唱団を作るのを手伝った。一緒に外出を楽しむことも多かった。

右—1968年に韓国ビッグ・ブラザー・オブ・ザ・イヤ―賞を受賞したブロンソン兄弟は現在ユタ州に住み、今でも合唱団の子供たちと連絡を取り合っている。

妻と將軍の夫人がパーティーに出席し、公務で出張中の朴大統領の代理には高官のひとりが出席したんです。」

そのうち院の子供たちはスタンが末日聖徒だということを知りました。ジニーはこう言っています。「私たちの中にはモルモンについて聞いたことのない者もいましたし、聞いたことがあってもモルモンは邪教だと信じている者もいました。でもスタンについてどこかほかの人と変わった点といたら、とても背が高いということだけででした。ある日スタンに言ったんです。『あなたがモルモンだなんて信じられないわ。とってもいい人なんだもの』って。『どうしてだい』って彼は聞き返しました。『院長先生だってモルモンだよ。』」

ほかの子たちに通訳していたジニーは、それを聞いて驚きのあまり口も利けず、子供たちがスタンの言ったことを教えるようせがんでいる間も、しばらくはただぼうぜんと座っているだけでした。というのも、ほかの宗教団体が孤児院のスポンサーだったため、院長として就任するに当たって、ファン姉妹が自分の教会について話さないことが条件だったのです。少女たちが知っていたのは彼女がクリスチャンだということだけでした。

子供たちの興奮した様子から、スタンは口にははいけないことを言ってしまったと気づきましたが、遅すぎました。子供たちはファン姉妹に教会についていろいろ質問を始め、それが院のスポンサー団体の知るところとなっていました。ついにファン姉妹はその宗教に改宗するか辞職するか、どちらかを選択するように求められたのでした。

テンダー・アップルズ・ホーム

ファン姉妹が自分で孤児院を始める決心をしたのはその時でした。それがテンダー・アップルズ・ホームです。教会に興味を示した子供たちは、許可を得てファン姉妹と共に暮らすことになりました。

孤児院の経営は、経済的には困難の連続でした。スタンはアメリカで基金を募り、スポンサー探しに奔走しました。彼は、ファン姉妹が経済的に支援してくれる人々をいつも探し当てたと言います。「彼女の特技のひとつは、人の心を開いて彼女の事業の信奉者にしてしまうことです。きっと彼女の誠実さがそうさせたのだと思います。」

1974年から1977年まで韓国ソウル伝道部で伝道部長を務めたユージン・ティルは、ファン姉妹の粘り強さも大きな理由のひとつだと感じています。「ある物が必要となれば、彼女はそれを完全に手にするまで満足しません。目標が達成されるまで一時も目をそらさないのです。人が自分自身の利益のために、そのように断固として事に当たるのは、理解できるところです。しかし彼女は、その努力が実って衣類や金銭、食物が手に入ったとしても、自分のために使うことは一切ありませんでした。」

ホームでは、子供たちの物質的な必要を満たすと同時に、みたまを感じて成長する機会も得られるように配慮されていました。1975年1月から3年間テンダー・アップルズ・ホームで暮らしたジェシカ・ライアン・オンは、当時のことをよく覚えています。子供たちは朝6時に起きて、賛美歌を歌い、祈りと聖典学習で一日を始めるのでした。ファン姉妹は子供たちよりも早く起きて祈りと聖典学習を終え、子供たちのために火をおこして家を暖





めておくのが常でした。月曜日の夜は家庭の夕べ、そして日曜日には全員が教会に集えるように、バス代まで用意してくれました。

また、ファン姉妹は少女たちに、福音を広める助けとなるようにと教えました。1974年にティル伝道部長が韓国に赴任した時には、ある調査によればソウルでの教会の知名度は住民の10パーセント程度にすぎませんでした。伝道部長は3年間の任期中、宣教師と共に教会の知名度を上げることに全力を注ぎました。ティル伝道部長は数人の宣教師を選んで「ニュー・ホライズンズ」という名のボーカルグループを作りました。そしてファン姉妹の同意を得て、彼らはテンダー・アップルズ合唱団と共に、韓国の人々に福音を紹介するためコンサート活動を始めたのです。

グループは大変な評判を得ました。ティル伝道部長はこう言います。ファン姉妹は名声のさなかにあっても「なすべきことをしているだけなのだからおごってはいけない、いつも子供たちに教えていました。」3年後、教会の名を聞いたことのあるソウル市民は70パーセントに達していました。

ファン姉妹の目標のひとつは、できるだけたくさんの子供たちを末日聖徒の家族に養子に出すことでした。およそ20年間に育てた84人の子供のうち、33人がアメリカの末日聖徒の家族の養子となって海を渡りました。12人が神殿で結婚し、9人が専任宣教師として伝道しました。

ファン姉妹は少女たちが責任感を学ぶこと、そして公平に扱われることが最も大切だと考えていました。ホームの食事の支度、洗濯、掃除などの仕事をそれぞれ分担し、物を大切に扱うように教えました。修繕すれば着られるブラウスをだれかが捨てた時のことをジェシカはよ

く覚えています。ファン姉妹はごみの中にそのブラウスを見つけると、儉約の大切さを説きました。そして次の家庭の夕べには、一人一人に針や糸の入ったプラスチックの裁縫箱を配って、継ぎの当て方を教えたのでした。

今なお母のように

少女たちが成長して手元を離れた今も、ファン姉妹は皆のことを気にかけています。前ソウル神殿介添え役のローズマリー・スローバーは、夫のロバートと2年前プロボに帰還しました。その時彼女は、ファン姉妹からユタ州に住んでいる子供たちが元気であるか調べてほしいと頼まれました。特に韓国から行ったばかりの子が、ホームシックになっていないか心配だったので。ファン姉妹は今なお子供たちの多くと音信を保ち、質素な自室（現在ソウルのホームの残りの部屋は貸している）には、子供たちやその家族の写眞が所狭しと飾られています。

成長した少女たちも「母親代わり」のファン姉妹を忘れてはいません。1990年10月、ファン姉妹はアメリカ人家族の養子として渡米する子供たちに付き添って、アメリカを訪れました。テンダー・アップルズ合唱団で歌っていた少女たちの多くが、「母」と仰ぐファン姉妹に会うために、アメリカ各地からはるばる集まってきました。満面の笑みに涙をためて「娘たち」を迎えたファン姉妹のことを、ティル伝道部長は話してくれました。ほとんどの娘たちがそれぞれ夫や子供を伴って到着するや、ファン姉妹は家族全員を固く抱き締め、まるで二度と離したくないというようにしばらく動こうともしませんでした。

「ファン姉妹がこんなに感情的に振る舞うのを見たこ

左端——「大靴おじさん」が韓国勤務を終えて帰国した日は、皆にとって悲しい日だった。

左——合唱団のレコードアルバムを手に持つアメリカのテレビタレント、アート・リンクレターと合唱団員。
右——1968年、韓国駐在アメリカ大使にレコードアルバムと盾を贈るファン姉妹。



とがありません」とティル伝道部長は言います。「彼女がいなかったらこの娘たちはどうなっていたかと思うと、なおさら感動を覚えずにはられません。少なくともふたりは死んでいたはず。ほかの娘たちも路頭に迷ったり、下働きとしての道を歩んだかもしれません。ファン姉妹がこの娘たちに物質的な救いをもたらしたことは明白ですし、福音を紹介することによって霊的な救いの機会も与えたのです。」

大きく広い心

ファン姉妹の無私の奉仕の心はホームの子供たちにとどまらず、どんな人にも差し伸べられています。ジニーはほほえみながら話します。「彼女の心は世界中の人々にも届くほど広くて大きいので、だれでも愛し、受け入れることができるのです。」3年半前、ジニーは韓国に一時帰国して、そのことをはっきりと知りました。この時ジニーは、28年前に離れ離れになったきりの兄弟を捜し出したのです。やっと見つけた時には、彼はアルコール依存症で、精神的にも肉体的にも病んでいました。家も金も仕事もなく、身にはぼろをまとっていたのです。ジニーはやむなく彼を公的な施設に入所させました。

患者の家族が日用品をそろえることになっていたため、ジニーはファン姉妹に連絡を取りました。ジニーは、お金を置いていくから、ときどき施設に電話をして日用品が足りているか確かめてくれるように頼みました。ファン姉妹はふたつ返事で承知しました。しかし、ファン姉妹は施設に電話をしませんでした。そうではなく毎週見舞いに出かけたのです。そのころ彼女は大きな幼稚園の園長の職にあったにもかかわらず、その忙しい仕事の合

間を縫って、見舞いのお菓子を作り、バスで施設に出かけ、病気のため何の反応も示さないジニーの兄弟の手を握ってあげるのです。彼女はそれらすべてを、ほぼ1日ばかりで、しかも定期的に行なっていたのです。

「そこまでしてくれるなんて信じられませんでした。それまで会ったこともない人なのですよ。『毎週楽しみにしているのよ』と言うんです」とジニーは語っています。

スタン・ブロンソン兄弟も言います。「仕える天使(教義と聖約7:6参照)がいるとすれば、ファン姉妹は間違いなくそのひとりです。主はこの目的のために彼女を備えられたと、私は心から信じています。」

韓国の教会の開拓者のひとりであるファン姉妹は、この地上に神の王国を建設するためにできる限りの働きをしてきました。長年、地方部やステーキ部の扶助協会会長として働き、1985年にソウル神殿が建てられてからは、神殿での奉仕を続けています。前神殿長のロバート・スローバー長老は、ファン姉妹は通常の週1日ではなく、2日神殿で働かせてくれるように志願したと言います。なぜでしょうか。スゼット・マーブルはこう証言します。「主のみ業だから、と言うのです。主のためには何でもするし、しかも喜んでする人なのです。」

ファン姉妹の模範によって、彼女を知るすべての人が影響を受けてきました。「今までの行ないを口にするのもなく、ただ静かに彼女らしくみ業に励み続けるだけです」とスローバー姉妹は述べています。

ジニーはこう言います。「彼女のことを思わない日はありませんし、いつも模範にしています。彼女は、たったひとりでも大きな働きができることを教えてくれました。」□

PHOTOGRAPHY BY ANNE C. BRADSHAW, ELDER CARL ANDERSON, AND COURTESY OF BLACKPOOL TOURISM DEPARTMENT



ジョー・フォルカット長老

イギリスで分かち合った福音の光

アン・C・ブラッドショー

イギリスの海沿いの都市ブラックプールは、昼間は普通の街に見えますが、夜になりあちこちに照明がともると、一変して美しい場所になる有名な保養地です。

ジョー・フォルカット長老は外見は普通のイギリス人に見えるかもしれませんが、みたまの光が彼の人生を変えました。彼はみたまの助けを得て、人々を福音の光へと導いています。

神の恩

ジョルヨン・ソームズ・フォルカット長老はイギリス・レスターステーク部グレンフィールドワード部の出身です。イギリス諸島で唯一車いすに乗っている宣教師であり、対まひにかかりながらも、これまで多くの障害に打ち勝ってきました。

伝道の初めのころ、フォルカット長老は自分が伝道に出たことに対してプライドを感じていました。「障害のある体で伝道に出たのは非常に立派なことだ。伝道に出なくてもよい十分な理由があるのに、伝道に出ているのだ」

様々なネオンが夜の街を明るく照らし出すように、ジョー・フォルカット長老の信仰もブラックプールに住む人々の生活に光をもたらしている。

とよく思ったものでした。

しかしその後、早朝のモルモン經の勉強会で、彼はモーサヤ書第2章21節から24節を読みました。「そこには奉仕のことが記されていました。私たちが全身全霊の力を尽くして仕えても、私たちは神に恩を受けている。主が命じられたことをすべて行ない、どんな状況にあってもおごりを憤むこと。主はそれを私たちに求めておられる、と書かれていたのです。」彼はほほえみながらそう語っています。

「このことを学んで私は本当に謙遜な気持ちになりました。自分^{ほんそん}はそれほど立派ではない。ただ求められていることを行なっているだけだ。そう思ったのです。」

求められていることを行なう、というのがここ5年間のジョーの指針でした。5年前までは彼の足は普通の人と同じように動いていたのですが、背骨に凝血ができて事情が変わりました。100万人にひとりの割合で起こる病気です。中年で発病し、脳障害を起し、死亡するケースがほとんどです。

ジョーは一命を取り留め、足以外は、正常な機能を回復しました。

彼は、度重なる入院にもかかわらず、回を重ねるごとにかえって快活になっていきました。神権の祝福を受けながら、証を強め、現在の力あふれる宣教師になったのです。

伝道への道のり

振り返ってみると、ジョーは自分の人生の転機をはっきりと予知していました。「自分の両足がまひしたままであることを知らされた時、私はみたまのささやきによって備えができていました。ですから医師から厳肅な面持ちで『お話ししなければならぬことがあります』と言われた時、私はてっきり『残念ですが、もう望みがありません。死を覚悟してください』と宣告されるかと思いました。『もう再び歩くことはできないでしょう』と言われた時は、むしろほっとして、素直にそれを受け入れることができました。」

歩けない事実を受け入れることは、むずかしくはありません。ただ、あらゆることに対して、歩けた時とはまったく違った仕方に対処することや、順応することはたやすくありませんでした。ジョーはどのような事柄にも不自由な体で対処する方法を学びました。むずかしい問題に出合ったときの彼の好きな言葉は「あなたは笑うことも泣くこともできる。でもあなたが笑えば人々はもっとあなたを好きになる」でした。

ジョーの機能は回復に向かい、人の助けを借りなくても、ひとりで動き回れるようになりました。



彼自身の証もまた強くなりました。ジョーは教会の中で育ちましたが、青少年の時期に教会から遠ざかっていたことがありました。好ましくない友人との交際を続け、悔いの残る行ないもいくつかしました。しかし、次第に宣教師たちの影響を受け、母親を安心させるためにも教会に戻るようになりました。

「教会が真実かどうかを知ろうと決心したのは、私が病院に入っていた時でした。入院が何カ月にも及ぶにつれ、断食し、祈る機会も多くなりました。」(ジョーの背骨は曲がり始め、肋骨から骨を移植する必要があったのです)

ジョーが初めて断食を終えた時、エールズベリーワード部の監督がジョーを訪れ、ドライブに連れ出してくれました。「監督と私は美しい森林地帯に入りました。森の中をゆっくりと車で走っていると、ジョセフ・スミスの最初の示現が思い出されてきます。私は、森の中の美しいものすべてが神のみ手の中にあるという、とても強い印象を受けました。同時に、この教会は救い主の教会であり、私は伝道に出るべきだと、はっきりわかったのです。」

以後、ジョーの証は弱まることはありませんでした。

伝道に出る決意

その後、ジョーは所属ワード部のクラス討論で伝道について話し合う機会がありました。この時、伝道に出たいという望みが彼の心を強く捕らえました。教師は、伝道に出ることを強調しながらも、ジョーに疎外感を与えたり、当惑させたりしないように、次のように言ったのです。「もちろん、ジョーは行く必要はないんだよ、車いすでは伝道は無理だから。」

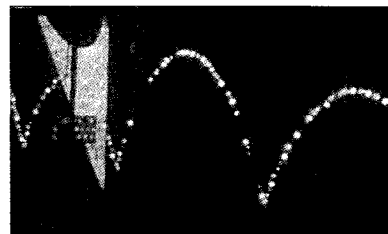
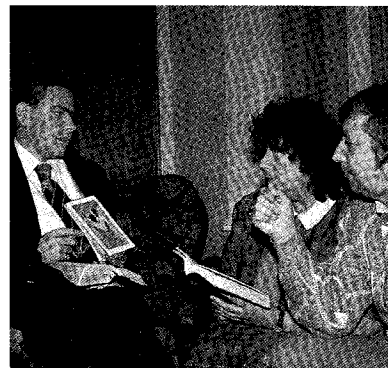
「その言葉で伝道に行く決心ができたんです。教師のその言葉を聞くと即座に、『いいえ、私は伝道に出ます』と答えました。」フォルカット長老はそう語ります。その後間もなく、ジョーは祝福師の祝福を受け、さらに決意を強めました。というのも祝福文の中で、ジョーは伝道に出て人々を改宗に導くと記されていたからです。

人生に対する建設的な態度がどれほどジョーの生活を変えたかは、彼がイギリスのマンチェスター伝道部に赴任する以前の生活を見てもわかります。ジョーはいくつかの身障者全国スポーツ大会に参加し、賞を獲得しました。さらに地元の職業訓練所に入所を申請し、実際の入所は2年後であることを伝えたにもかかわらず、担当者はジョーの入所許可を約束してくれました。訓練所は彼の説明を納得し、伝道に出ている間も、特別にジョーの在籍を認めると言ってくれたのです。

不可能なことは何もありません

ジョーにとってこのような祝福は、人生の苦難を償って余りあるものでした。彼は車いすで伝道することに利点さえ見いだしています。「私は2年間を靴1足だけで過ごした唯一の宣教師になるんじゃないでしょうか。しかも最後まで靴は新品同様」と彼は冗談を言います。

とはいっても、特別な車いすのために何度もタイヤを替えるといった多少の不便もあります。ジョーは伝道に出る前に、軽量で、タイヤの細いスポーツタイプの車いすを買うために貯金をしました。小型の車いすはチラシ配りや戸別訪問がしやすく、後輪で走ったり、雑踏の中を人の間を縫って進んだり、巧みに階段を上ったりすることも



左——イギリスの名高い海岸保養地ブラックプールで、海風を受けて雨上がりの遊歩道に行くフォルカット長老と同僚、ティーン・ピール長老。

上——レッスンの時も求道者を探す時も、フォルカット長老は笑顔でこう言います。「私は求められていることを行なっているにすぎません。」



上——フォルカット長老は、求道者のケビン・スミスとの間にふたりを結びきずなを見いだした。

右——宣教師のアパートで、家事を分担するフォルカット長老とビール長老。

できるようになります。

「望むことは、それが可能であれば、何でもできます。不可能であっても、ただ時間がかかるだけです。」彼はいつもそう言います。

フォルカット長老の同僚で、イギリスはウエストン・スーパー・メア出身のディーン・ビール長老は、同僚のそのような態度に感謝しています。「フォルカット長老と一緒に働いて学んだことは、苦難を知らない人々だけが、この世の苦難を見て神に恨み言を述べ、実際に苦難の中にある人々は、往々にして信仰深く謙遜だということです。」

フォルカット長老が語るように、「そもそも人生は苦労なしで過ごせるようにはできていません。困難に満ちた試練の場所なのです。しかし自分を見失わず、神の計画に従うなら、ついには祝福を得ることができます。」

まれに見る出会い

主のみ業に携わっていると、祝福がすぐにもやって来ることがよくあります。ジョーは伝道中にそのようなことが起きるのを何度も目にしました。たとえば、ケビン・スミスに会った日もそうでした。

ケビンは同じ職場で働く末日聖徒の若い姉妹の模範によって、教会に興味を持つようになり、モルモン経が1冊欲しいと自分からブラックプールワード部に求めてきました。ジョーと同僚が、彼にモルモン経を届けることにしました。

「その時点では、私は家の中に宣教師を招き入れるほどには、教会に興味を持っていなかったのです」と16年間車いすの生活を続けているケビンは語りました。「モルモン長老たちに対して固定観念しか持ち合わせていなか

ったのです。背が高く、健康そうで、大学出立のアメリカの若者が、スーツをきちんと着こなし、歯磨きの広告にでも出てきそうな笑顔をたたえているというものでした。もしふたりがそのような外見の宣教師だったら、おそらく私はドアを開けなかったでしょう。ところが、そこにいたのは謙遜で親しげな人々だったのです。しかも互いの車いすを見て、私たちは驚きの目をみはってしまいました。」

「ケビンはとてもすばらしい人です。」車いすに乗った求道者を見て、目を丸くしたフォルカット長老はそう語ります。「初めて彼の家を訪問した時、家に着く前から何か良いことが起こるような気がしました。」

フォルカット長老とケビンは顔を合わせた瞬間から親しい友達になりました。そしてこの最初のレッスンから程なくして、ケビンはバプテスマを受けたのです。

光を分かち合う

ジョーの模範は、尽きることのない力をたたえています。お休み会員たちがその模範によって教会に戻ってきました。さらにジョーは、進んで耳を傾けるすべての人に福音を分かち合ってきました。伝道部長は彼の「善良で快活な精神」に喜びを表わしています。

ちょうどブラックプールの街の灯が夜のとぼりを明るく照らし出すように、多くの人々がジョー・フォルカット長老の輝く信仰によって豊かな生活を見いだしました。

フォルカット長老の証には輝きがあります。しかもこの証は、どのような障害も乗り越え、限界を押ししのけ、様々な問題を祝福に変える力を秘めています。□



理解の目を開いて

グワダルーベ・オンティベロス・オーティス

同僚と私が訪れたのは、会員から紹介された若い母親の家でした。何度もノックすると、彼女がドアを開けて、私たちを中に招き入れてくれました。自己紹介をし、近所の人が彼女を紹介してくれたことを話すと、彼女は私たちを受け入れ、前に座って私たちの最初のレッスンを聞こうとしてくれました。

彼女の10歳ぐらいの娘も同じ部屋にいたのですが、私たちの方を見ようともせず、テレビの音を大きくしました。母親の方は、とても熱心にレッスンに耳を傾けていて、その音には気づいていないようだったので、同僚はレッスンを続けました。

何分かして、少女はまた音量を上げました。音が大きすぎて、母親の声がよく聞き取れないほどです。それでも母親は、何の対処をするでもなく、相変わらず私たちのメッセージに熱心に聞き入っています。私は、少女のやっていることと、母親が何もしないことに、非常にいらだちを覚えました。少女がテレビを見ているわけでもなく、落書きをしていることに気づいた私は、さらにいらだってきました。努めて平静を装っていたのですが、心の中では、「なんて甘やかされた子供なのだろう。それに母親はなぜ何も言わないのだろう」と思い続けていました。

少女がテレビをつけたまま部屋から出て行った時、私の思いはレッスンか

ら離れ、はるかかなたにありました。なんと腹立たしかったことでしょう。

しばらくして少女が戻ってきた時、初めて顔が見え、彼女がダウン症で精神的に障害があることに気づきました。私は、同僚のメッセージに集中しきっている若い母親を見て、「なんと思いやりのある母親なのだろう」と思いました。「きつと娘の状態を思うと、彼女に何も言いたくないのだろう。あるいは私たちの話を中断したくないのかもしれない。」

私は謙遜^{けんそん}になって、レッスンの次の部分話を話しました。それから祈り、次の約束を作り、しばらくいろいろと話をしました。話しているうちに、彼女は耳が不自由で私たちの唇の動きを読んでレッスンを理解していたことを知り、驚嘆しました。

家を出る時、私は母親と少女を誤解していたことをとても申し訳なく思いました。ふたりとも、私たちがテレビの音を気にしていたことには気がつかなかったのです。

私は自分の気持ちを口には出さずしていましたが、思いをコントロールすることができませんでした。状況をほとんど、というよりまったく理解しないまま、判断を下していたのです。この経験があつて以来、私はいつも自分の思いをコントロールし、すぐに人を裁くことがないように努めています。□

「見えなかったけど、 イエス様が本当に あそこにいるって感じたわ」

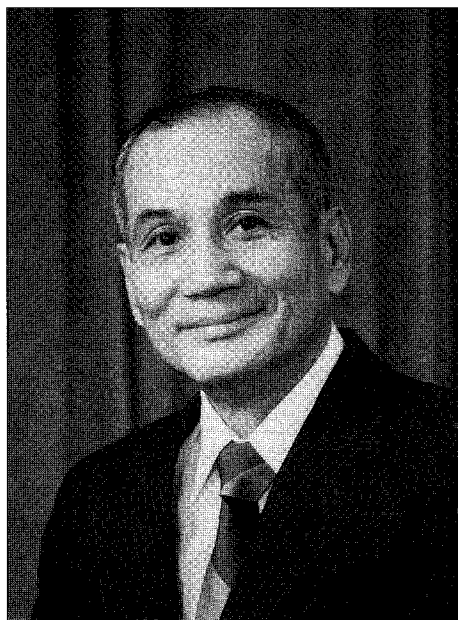
アジア北地域会長会第二副会長
サム・K・島袋

数年前、ある家族の記事を「チャーチニュース」で読みました。その家族は、バプテスマを受けて1年後に、永遠の家族として結び固めを受けるために神殿に参入しました。若い両親にとって、それは美しく神聖な経験でした。小さな3人の子供たちが、白い神殿着を身にまとして両親のそばにひざまずき、神権の力によってこの世だけでなく、永遠にわたって家族として結び固められたのです。彼らは、この神聖な儀式を受けられた特権と祝福に感謝し、喜びの涙を流しました。

結び固めの儀式を終えて家に向かう車の窓から、8歳の娘が名残惜しそうに神殿を眺めて言いました。「見えなかったけど、イエス様が本当にあそこにいるって感じたわ。」

教義と聖約第97章の15節と16節には、神殿において主の存在を感じるができるという主の約束が書かれています。「而して、わが民主の名によりてわれに一つの家を建て、これを汚さざらんため穢れたるものをその中に入るを許さずば、わが栄光その家の上に留まらん。然り而して、その中にわれ入り来る故にわれその中に在るべし。されば、この家に入り来るすべての心清き者は神を見ん。」

主は、神殿に来る者に祝福を用意さ



れています。すなわち喜びと平安、希望、励まし、達成感、愛、肉体と霊の再新、救い、昇栄、そして主が身近にいらっしゃるという証です。どれほど多くの人々が内なる喜びと平安、希望、励ましを求めて神殿に参入し、美しく神聖な環境の中でそれらを見いだしたことでしょう。どれほど多くの人々が、直面している問題に対する答えや指示を求めて神殿に参入し、その願いをかなえられて出てきたことでしょう。私たちは肉体的、精神的に様々な病や困

難に苦しむとき、癒しを得、平安を得るために神殿に赴きはしないでしょうか。神殿の静かで敬虔な雰囲気の中で、どれほど多くの人々が主の愛を感じ、主がおられるのを実感したことでしょう。

主の宮居は、主を求める信仰深い人々に、主が愛とみたまと祝福を注がれる所なのです。そのような聖徒には、コリント人への第一の手紙第2章9節に述べられた、次のような主の約束が文字どおり成就するでしょう。「聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。」

主の家に行くことを目標とする男女は、まことに幸いです。彼らがこのような決意をするとき、詩篇第122篇1節に記された主のみ言葉は、尽きることのない満ち足りた思いと深い喜びの源となるでしょう。「人々がわたしにむかって『われらは主の家に行こう』と言ったとき、わたしは喜んだ。」

心を込めて主の家に参入し、キリストのみもとに行きましょう。目には見えないかもしれませんが、イエス・キリストがそこにおられると感じるでしょう。□

フローラ・ベンソン姉妹，逝去

エズラ・タフト・ベンソン大管長の妻，フローラ・スミス・アムッセン・ベンソン姉妹の葬儀が8月19日に行なわれた。8月14日，ユタ州ソルトレークシティの自宅で老衰のため死去。91歳であった。

ベンソン姉妹が将来の夫君に出会ったのは，ふたりがユタ州ローガンにある州立農業大学に在学中の時である。1926年9月10日，ソルトレーク神殿で結婚した。

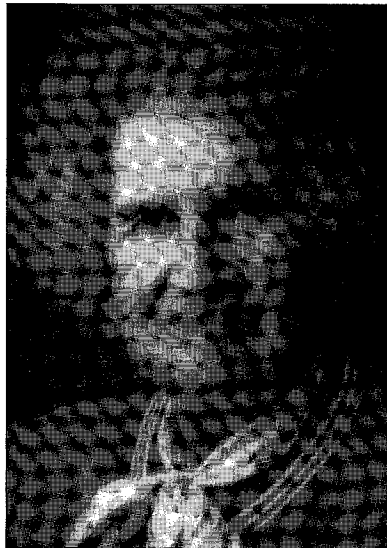
ベンソン姉妹は，1901年7月1日，ユタ州ローガンでカール・クリスチャン・アムッセン，バーバラ・マクアイザック・スミス・アムッセン夫妻の間に，末子として誕生。デンマーク出身の父親は，ミズーリ州セントルイスから牛に引かせた荷馬車に乗ってソルトレークシティに入植し，その後ユタ州で開拓民の貴金属商のひとりになった。しかし，フローラが父親を知ることにはなかつた。彼女が1歳の時に他界したのである。

フローラは，ソルトレークシティ，ローガン，カリフォルニアで小学生時代を過ごし，ローガンのプリガム・ヤング学院を卒業。ユタ州立農業大学大学院へ進んだ。

後に，ハワイ諸島で専任宣教師として伝道。

結婚式を挙げたその日に，ふたりはアイオワ州エイメスに向かって旅立った。夫がアイオワ州立大学の大学院に通うためである。1939年から5年間は，農務行政官としての夫の仕事のために家族は首都ワシントンに移り住む。1953年には，ドワイト・D・アイゼンハワー大統領の下で農務長官として8年間，再びこの地に住んだ。

ベンソン長老は，合衆国行政府の閣僚として任命を受ける10年前の1943年，十二使徒評議員会のひとりに召された。夫が教会と国の重責を担っている間，



フローラは6人の子供を育てて，夫を支えた。子供たちが成長してからは，常に文字どおり夫の傍らにあって，共に世界中を旅した。

当時教会を管理していたジョージ・アルバート・スミス大管長から，第二次大戦終結後のヨーロッパに赴き，教会員への救援活動を管理するように命じられた時，ベンソン姉妹は家庭に残り忠実に家族を守った。夫を励まし支えるために，欠かさず明るい手紙を任地に送り，10カ月間の夫の不在中，献身的に子供たちの養育に当たった。

ベンソン姉妹は，子供は12人欲しかったと語ったことがある。「でも，6人のこのすばらしい子供たちで満足しようと思いました。」

家族はベンソン姉妹にとって一番大切な存在である。「子供たちをしつけ，導く最上の方法は，できる限り一緒にいることです。」

ベンソン大管長は，ベンソン姉妹についてこう語る。「妻は〔私たちの子供と一緒に〕祈り，歌い，泣き，学び，どんな必要も満たそうと努めています。彼女のあつい信仰に障壁はありません。問題が起こると，いつも祈りを通して

主のみもとに行きます。大抵は家族で祈りますが，一番かかわりの深い人と，直接，特別な祈りをするこもしばしばです。子供たちは皆，彼女の福音に対する強い証の中で育てられ，私にとっても妻はいつも靈感の源です。」

ベンソン姉妹は自分の家族について，ある報道記者にかつてこう語った。「教会とその教えやお互いに対して，これほど忠実で信実な子供が，6人もそろろうということはないでしょう。夫の教会での召しとこのことは，私の最高の報いであり，命です。」

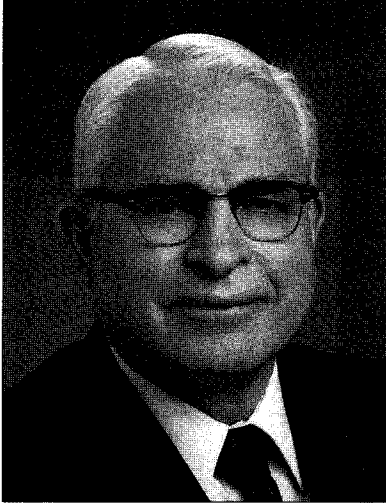
農務長官の妻としての重責に当惑したことはない，ベンソン姉妹は次のように述べたことがある。「ホワイトハウスやそのほかの場所での社交生活は大変重い責任ですが，標準を曲げたり，家族をないがしろにしたことは一度もありませんでした。」

ベンソン姉妹は家庭での訪問者のもてなしにアルコールや茶，コーヒーを出さず，トランプ遊びをしなかったが，首都ワシントンの社交界ではベンソン姉妹の思いやりにあふれた態度は評判であった。この間，ベンソン姉妹は，全米年間ベストホームメーカー賞を受けた。

ベンソン姉妹は青春時代に教会の様々な責任を経験した。成人してからも，扶助協会副会長，ワード部の若い女性会長，ステーキ部の若い女性管理会員，初等協会と日曜学校の教師を歴任。プリガム・ヤング大学からは，傑出した女性に贈られる賞を受け，アイダホ州レックスバークのリックスカレッジからも同様の賞を受賞し，1985年には家族に尽くした愛のために，末日聖徒女子大学協会から「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」に指名された。

遺族には，ベンソン大管長とふたりの息子，4人の娘，34人の孫，51人のひ孫がいる。□

元教会幹部、 逝去



H・バーラン・アンダーセン長老の葬儀が、1992年7月20日に行なわれた。アンダーセン長老は癌のため、ユタ州オレムの自宅で死去。77歳であった。

アンダーセン長老は、1986年4月、5年の任期で七十人として支持を受け、1989年4月には七十人第二定員会に召された。

アンダーセン長老は、メキシコ・中央アメリカ地域会長会第一副会長、南アメリカ南部地域会長会第二副会長、ユタ中央地域会長会第二副会長、中央日曜学校会長会第二副会長など、教会幹部として多くの責任を果たした。また、妻のシャーリー・ホイト・アンダーセン姉妹と共に、ペルーとアルゼンチンで伝道した。

青年時代は、合衆国北部中央諸州伝道部で専任宣教師として働いた。

アンダーセン長老はブリガム・ヤング大学で会計学の学位を取得、スタンフォード大学で法律学を学び、ハーバード大学で法律学修士号を得た。ブリガム・ヤング大会計学部の名誉教授であった。□

家庭をなおざりにせず、 職業と教会の責任を 両立させるには

3 人の子供を育て、ふたりのレマン人を養女にもらい、また常に教会の召しを果たしながら、内科医としても働いてきた中で、私は大切な原則をいくつか学びました。

●朝食と夕食を、家族がそろって取るように、あらゆる手段を講ずる。それは大切な団らんのひとときです。私の場合は、仕事を毎日5時から5時半の間に切り上げ、残った書類は子供たちが寝た後で夜遅くに片づけました。

●自分でなくてもできる家事を決め、それをしてもらう人を雇う。仕事を持つ人は、お金を払って時間を買う必要のあることもご存じでしょう。

●計画を立てる。細部に至るまで注意が行き届くように、あらゆることをリストに書き出すのです。食事や買い物や家族の外出などは前もって計画し、必要なものをリストアップします。教会の責任のために必要なこともリストに書きます。その週のうちにしなければならぬ仕事もリストに挙げておきます。

●すべての人の必要を完全に満たさなければ、と考えること。家族に、あなたにできないこともある、と知ってもらってください。職場の人々にも、あなたには家庭を持つ者としての責任があることを理解してもらってください。

●自分の時間を見つけること。ひとりになって、一息入れて、したいことをしてください。

ユタ州ソルトレークシティ
スーザン・ダンドイ

接触を保つ

私の夫は、仕事や通勤、監督会の責任などで、一週間まったく子供と顔を合わせないことが、たまにありました。そこで、夜遅くなくても子供たちが学校からもらってきた文書や試験の答案を見て、一人一人にちょっとした励ましの言葉を書くことにしたのです。学齢前の子供にも書きました。

週末になると、夫は教会のホールのいす並べなどの仕事を選んで、家族と共にしてくれました。私たちにとって、それはとても貴重な時間で、たとえ夫と一緒にそこにいられないときでも、その愛を感じる事ができました。

アイダホ州シュガーシティ
イレイン・K・キング

均衡の取れた優先順位を

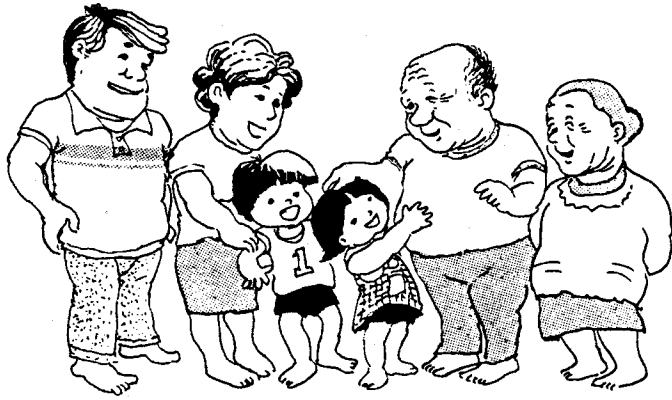
永遠の目標があると、物事を広い視野に立って見る事ができます。均衡の取れた優先順位をいくつか挙げてみましょう。

●最優先するのは伴侶です。お互い、十分に支え合う必要があります。

●2番目は家族です。

●次は、職業と教会の召しをバランスよく配分することです。苦労はあっても、どちらを犠牲にすることもなく、両立させることは可能です。仕事の予定が教会の召しとぶつかったときには、自分の目標を見直し、新たな視点に立って、めどが立たないか考えてみてください。

アーカンソー州ラッセルビル
クレイグ・M・パットバーク



家族を第一にする

監督であり、弁護士であり、4人の幼い子供の父親である私にとって、この3つの役目を同時に果たすのは実際に大変です。そのような中で私は以下のようにして、優先すべきことを大事にしようと努めています。

●家族のための時間を特別に取ります。土曜日を家族の日にして、スポーツやピクニック、映画などの楽しい活動に充てています。月曜日の夜はもちろん、家庭の夕べのために確保しています。

●昼休みは極力帰宅して、妻や子供たちと昼食を取るようにし、都合がつけば裏庭のプールで子供と一緒に泳いでいます。

●家を留守にして泊まりがけで出かけるような仕事がよく入りますが、家族が第一だと確信していますので、どんなにお金になるものでも断わるようにしています。

テキサス州ベイシティ
リン・C・グリービ

家族の時間を予定に入れる

教会や仕事の約束を予定に入れるのと同様に、家族の時間をスケジュールに組んでください。家族での外出、伴侶との毎週のデート、子供一人一人と過ごす時間などを、定期的なものとして予定に組むのです。このような家族の時間は必ず取るようにしてください。何かもつと「急を要すること」が起きたとしても、この時間をつぶしてはいけません。

教会の召しや仕事のストレスを引かずって帰宅しないように努めてくださ

い。家庭はこうありたいという像に自分の姿を重ね、家に帰ったら家のことに気持ちを集中するのです。

必要なことは前の晩のうちに考えて、準備をしておき、毎朝の日課をこなすことがストレスや疲労のもとにならないようにしてください。

ユタ州ソルトレークシティ
ロザリー・デービス

決定するときは一緒に

優先順位を決めるときは、なるべく皆で決めてください。私がステーキ部長会にいて、仕事の出張も多かったある年に、カプスカウトに所属していた息子が、松材で競走用の車を作るのを手伝う時間を取ることにしました。最終の仕上げ段階に来たところで、ステーキ部長会の集会に呼ばれたのですが、断わるべきか行くべきか、息子と一緒に決めようと思いました。そして、ステーキ部長会に出席すべきだ、とふたりに判断したのです。

製作した車は、結局全部のレースに勝ちました。その車は何年も誇らしげに息子の部屋に飾られていて、見るたびに、一緒にむずかしい決断を下した時のふたりのつながりを思い出させてくれました。

カリフォルニア州サクラメント
ドン・M・グライムズ

物質主義を避けること

●仕事にどれだけの時間を費やすかを決めておきましょう。

●必要が満たせれば十分であることを心に留めましょう。もつと働いてもつ

とお金を、という誘惑を退けることです。

●教会の責任を調整しなければできない仕事は引き受けないようにしましょう。普通に教会に集うことができなくなるよりも、働く時間を調整する方がよいと思います。

●最優先すべきものは家族だということを忘れないようにしましょう。家族に奉仕し、共に働く喜びは、世の富や仕事の満足感より、はるかに大きなものなのです。

カリフォルニア州アーケジア
バーバラ・S・スパーリング

一人一人との時間を取る

夫であり、4人の娘を持つ父親であり、ステーキ部長会の一員で、大学の教授および学部長補佐であり、結婚と家族問題のカウンセラーをしている私ですが、家にまだ子供たちがいたころ、バランスの取れた生活をするうえで役立つことを、いくつかご紹介いたします。

●家族と教会を常に最優先しました。

●月曜日の夜は、必ず家庭の夕べをしました。

●毎週金曜日の夜は妻とデートをしていました。

●子供たち一人一人との時間を取り、数時間の散歩から、ときには数日にわたる旅行までしました。

●おもな祝日には何かするのを家族の習慣にし、誕生日や記念日は家族で祝いました。

●子供たちのコンサートやダンスの発表会、PTAの会合に出席するようにしました。

ミシガン州イストラランシング
シェルドン・G・ローリー

まとめ

1. 家族と過ごす特別な時間を取る。
2. 優先順位のリストを作るなど、よく計画して、時間を有効に使う。
3. 将来を見据え、永遠の目標を持つ。
4. できる限り、家族と一緒に決定をし、教会活動に参加する。(「チャーチニュース」1989年9月30日付)

みたまに導かれて要約筆記

岡山ステーク部岡山西ワード部 青山静

昭和35年、小学校で全国初の難聴学級が岡山市内の学校に設置されました。教員になって25年過ぎた昭和45年、私はこの小学校に赴任しました。当時難聴学級には3人の担任が必要でしたが、障害児にはあまりかかわりたくなかったり、経験のために引き受けると考えたりしていた職員もいるような状況でしたので、担任になる教師は3年ごとに代わるようになっていました。

同小学校赴任5年後、3年ごとの交代の時期を控え、校長から、3カ月以内に次の担任として適当な人を推薦してほしいと頼まれました。ちょうど私たち夫婦がふたりで改宗して約1年が過ぎたころでした。私は一生懸命考えた末、人や環境に慣れにくい難聴児の教育が、信頼と安定という確固とした土台の上に進められるよう、次の3つの条件を基に後任の教師を探すことにしました。第1に、担任と生徒が学校内で共に孤立しないように同小学校で数年は勤務している人。第2に、従来の慣例を破る形になりますが、途中で昇進して離れていってしまうことのないよう、男性より比較的昇進の可能性の少ない女性で、担任として長く勤められ、できれば子供たちが卒業してからも心のよりどころとなれるような人。第3に忍耐強く寛容で、理性によって難聴児を導ける、愛情豊かな人、というものでした。けれどもこの条件に合う人はなかなか見つかりませんでした。

約束の3カ月が近づいたころ、私の探している人は「もしかすると私自身ではないだろうか」と思ってきたのです。しかし第1、第2の点はともかく、第3の点では自信はありません。それでもこれからの努力で愛情は育てていけるかもしれないと思うようになり、決心して校長に訳を話し、難聴学級の交代のない担任にしてもらうよう頼みました。こうして私は昭和50年の春に

難聴学級の担任になりました。

難聴学級では、通常学級と同じ教科書を使い、同じ時間数で勉強することになっています。でも、勉強以前のことがいっぱいあったのです。まず子供たちの不明瞭な発音が聞き分けられるようにならなければ、教科の指導どころではありません。また1年生の中には、机、いす、黒板など、私の選んだ10の名詞のうち、3つしか知らないという子もいました。また、生徒たちに「ノートや鉛筆を粗末にはいけない」と教えたことがありました。物を大事に使うことが大切だ、と言いたかったのです。ところが子どもたちはこの「ない」の言葉を文字どおり禁止、否定の意味に解釈し、まだ使えるノートや鉛筆も放り出してしまったのです。

単純に言葉を教えるだけではだめなのか。この時、予想外の子供たちの行動に驚くとともに、言葉を教えることの重大さを痛感しました。

しかも高学年になると、実際に目に見えないもの、体験できないものを、言葉によって教えることが多くなります。教える教材をできるだけ単純にして、図にしたり、模型を作ったり、ひとつの準備に何時間もかかることがよくありました。同僚と共に、ああでもない、こうでもない、夜の8時や9時ごろまで考えたこともたびたびでした。こうして準備して教え、理解してくれたと思って質問してみると、返ってくる答えは全然予期しないものであったりします。どうしてわからないのか、どうすればわかってもらえるのかと、自分が情けなくなると同時に、難聴児がかわいそうになり、つい涙することもたびたびでした。

「力なき我にはあれど ^{いと}愛し子の 険しき道を 共に登らん」こんな歌を作って自分を励ましたこともありました。

改宗して7年目の昭和56年のことで

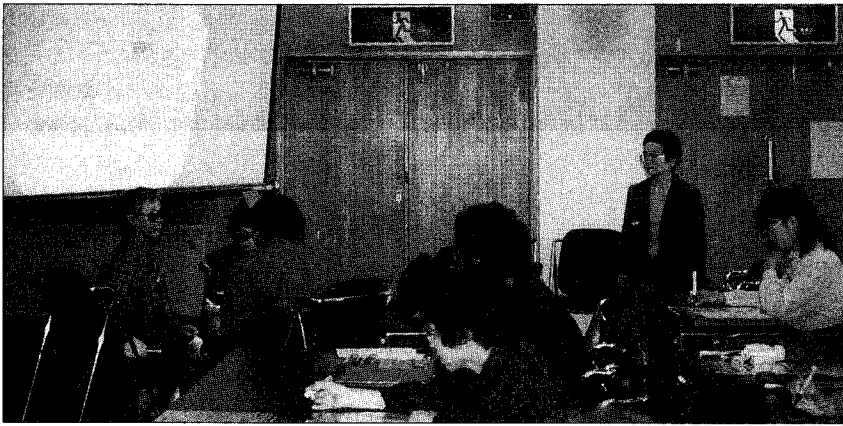
した。難聴者協会(幼い時から難聴の人や、人生の途中で難聴になった人たちで組織している団体)から講演に来てほしいと言われました。私は簡単に引き受けましたが、後で、大勢の難聴者に「どのようにしてわかっていただくのだろう」と心配になってきました。すると、「普通に話していただければ、要約筆記ボランティアの人が書いてくれますから」と言われるのです。

当日、私は半信半疑で話を始めました。すると要約筆記の人が、用意されたオーバーヘッドプロジェクターに透明のシートを置き、マジックで私の話していることを書きます。するとそれが、スクリーンに大きく写し出されました。難聴者はひとり残らずこれに見入っていらっしやるのです。

これはすばらしい。退職して身軽になつたらずひこの要約筆記の仲間に入れていただき、少しでも難聴者のお役に立ちたい。こう心に決めたものです。

要約筆記の仲間に入らせていただいた理由はもうひとつあります。私の母は、8年前に亡くなりましたが、とても聡明な人でした。幼い時、成績抜群ということで当時の郡長から表彰されたり、いわゆる教育ママで、私の学生時代、週に1回は学校へ授業参観に来たりするほどでした。また社会事情にも詳しく、年老いても理性の強い、しっかりした母でした。その母が亡くなる3年ほど前から耳が聞こえにくくなり、意思の疎通が困難になってきました。小さな声で話していると、のけ者にされたとがっかり肩を落としてしょんぼりしていることがあるかと思えば、人が変わったように怒り出し、物を投げたり泣きわめいたりして手がつけれなくなることもありました。そんな母を見て、私は悲しいとも、情けないとも、いとおしいとも、何とも言えない気持ちになるのです。聴力を失うとは、人をこんなにも変えてしまうものかと、つくづくと思わずにはいられませんでした。

聴力を失った母を思い、幼くして聴力に恵まれなかった難聴者を思うとき、わずかな行き違いで彼らに腹を立てたり、とがめたりするのは間違いであると改めて知らされました。そして「私



昨春秋、岡山市内の要約筆記者養成講座で、立って講義をする青山静姉妹。昨年のこの講座には約70人が参加した。要約筆記者として活動に参加するには、年1回開かれる同講座を修了する必要がある。

「山陽新聞」1992年5月29日付 山陽新聞社提供

の健康と家庭事情の許す限り、要約筆記クラブに属し、要約筆記を通して難聴児の母となり、中途失聴の方の娘となって、難聴者の障害に対する理解を深めていこう。そして、難聴者の皆さんがより良い社会参加ができるよう、陰ながら働かせていただこう」と思うのでした。

難聴学級の担任を務めて10年が過ぎた昭和60年、定年退職。退職した私は、待望の要約筆記の仲間に加わりました。けれども、人の言うことを即座に他人に読めるように書くのは容易ではありません。そのため隔週1回ずつ2時間の練習時間が設けてあります。たった2時間。約1年が過ぎても、不器用な私は練習の効果が上がりませんでした。

秋に近いある日の聖餐会で、私は要約筆記のことを考えながら礼拝堂の席に着いていました。その時、上の方から何か白いなずまのようなものを感じました。そのうちに「練習の機会を多くしたらできる。聖餐会でのお話を書けば機会が多い」と頭の中にひらめいてきました。

そうだ、そうだ。そうすれば練習できる。こうして次の週から、聖餐会でのお話を一生懸命ノートに書き続けました。

そのようにして書き続けて2年半。昭和65年3月3日。耳の日の行事で、難聴者の講演会に要約筆記に出かけました。数人いた要約筆記のトップバッターは私になり、聞くこと書くことに精神を集中してスタートしました。

15分ごとに交代をする申し合わせになっていましたが、30分たっても、45分たっても、交代をする気配はありません。60分。とうとう1時間半の講演を全部書いてしまいました。

講演が終わった時、どっと拍手が起きました。それは、講演者への拍手とも、要約筆記をした私への拍手とも思われました。要約筆記の仲間は口をそろえて、「ご苦労様。途中で代わりたかったのだけど、代わってもあなたのように書けないと思ったの。本当にすばらかったわ。」

その時、私は「汝心うちの中によく思い計り、その後願うこともし正しから

「高齢化社会が進むにつれて難聴者や病弱などが増え、今後ますます要約筆記の必要性は高まるでしょう。要約筆記のボランティア活動の輪をもっと広げていかなければ」と使命感に燃える。昨年四月から岡山要約筆記クラブの会長。

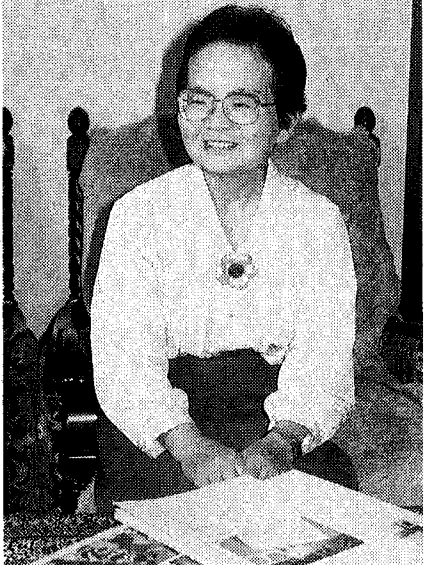
「要約筆記」とは聴覚障害者が参加する会議や研修会の会場で、発言内容をその場で要約して透明シートに書き込んでいく。これをオーバーヘッド・プロジェクター(OHP)で拡大し会場のスクリーンに映し出す。あるいは聴覚障害者が読めるように隣の席で発言内容をノートに書く。これらの手段で耳の不自由な人たちに発言内容の大意を伝える。同クラブの会員たちはそんな活動を精力的に進めている。

昭和五十五年に同クラブを発足させ、現在は岡山市内の主婦ら七十人が加入。月一回、岡山市福祉文化会館(同市小橋町)で学習会を開き、早く正確に、そして読みやすい要約筆記の練習を積み重ねている。

最近では、会員たちが力を合わせて映画やビデオを制作して、映画やビデオの字幕を入れる作業も進んでいる。また、映画やビデオの派遣活動の準備を現

「要約筆記ボランティアの輪をもっと広げたい」と話す青山さん

要約筆記
青山 静さん (66)
(岡山市東古松)



聴覚障害者の強い味方 外出手助けする 派遣活動準備中

「要約筆記ボランティアの輪をもっと広げたい」と話す青山さん

約筆記は歴史も浅くまだ知られていません。また年配の中途失聴者にとって手話をマスターするのは大変です。要約筆記は欠かせません。一人でも多くの方が講習会を受けて私たちが一緒に活動してほしい」と青山さんは呼び掛けている。

同講習会の問い合わせは、岡山市社会福祉協議会(0862-8361)。

ば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん」(教義と聖約9:8)という聖句を信じ、導きに従って練習を継続できたことを心から感謝しました。

平成3年4月。岡山要約筆記クラブで図らずも会長という名をいただくことになりました。

イエス様は、弟子たちの足をお洗いになりました。私もそのように、一人一人の足を洗う僕となろうと思いました。

「会長が代わってから、要約筆記の雰囲気が変わってしまいました。えらいもんじゃ」と難聴者協会会長さんがよくもらされます。

「要約筆記してくださる人は、皆さんそろって筆の天使のように見えます」と難聴者は口々に言っておられます。

「要約筆記はむずかしいので途中でやめようかと思ったけれど、先輩会員のやさしい指導で続けることができました。」「この会の中にいると、温かくきれいな気持ちになってとても居心地がいいの。」「不思議ね、やる気がする」「会長さんのご人徳の賜ですよ」などは、会員の声です。

会員は、この1年間に倍に増え、会合に出て行って要約筆記するだけでなく、病院への付き添いなど個人の必要にも応じて出て行くようになりました。新しく、ビデオや映画に字幕を付けることにも取り組み、皆で力を合わせて活動することで、難聴者に少しでも役に立つよう、喜んでいただけることを楽しみに努力しています。

アンモンは「私は自分が取るに足らない者であることを知っている。私の能力は弱い。それであるから、私は自分のことを誇らないでただ私の神のことを誇る。それは神のたもう能力によって何事もすることができからである。……私たちはこの土地で多くの大きな奇跡を行ったが、私たちはとこしえに神の御名にこの誉を帰して讚美する」と言っています。(アルマ26:12)

私の力でできたことは何もなく、すべては神様のみ力でできたのであり、ただ神様の導きに従って歩んできただけのことなのです。(あおやま・しずか ステーキ部扶助協会会長)

ゲツセマネを通して

鹿兒島地方部都城支部 永吉厚子

—— 昨年7月の最後の安息日、その日も朝から説教壇やレッスンで話される人々の言葉を、随分と遠くに感じながら聞いていました。こここのところ、こんな日々がもう随分長く続いています。育児や仕事に追われているせいなのでしょう、それとも14年目になる信仰生活の惰性から来ているのでしょうか。自分の霊が鈍くなっているのを感じていました。みたまが遠のき、証が失われ、自分の魂が際限のないやみに落ち込んでいきそうな不安にかられていました。世界の情勢を見ても末日は確実に近づいている。このままでは自分は救われない。自分の霊が助けを求めているのを感じていました。むなしく心を通り抜けていく話者の言葉を聞きながら、心の中で、ここ数カ月繰り返し祈っている言葉をつぶやいていました。「神様、どのような方法でもいいですので、私にまた、証をください。」

明るる日、朝から妙にせきが出ます。ここ数日、背中左側に痛みが走るのも気になり、てっきり風邪を引いたと思った私は、お昼ごろ掛かりつけの病院に風邪薬をもらいに立ち寄りしました。そこで私は突然、肺炎を宣告されたのです。1カ月の入院。3歳と4歳の子供を持つ私にとってはすぐには受け入れ難い宣告でした。でも試練はまだ続くのです。2、3日後、さらに肝臓のはれを指摘され、ある総合病院を紹介されました。そこで診断された私の病気は、すでに肺にも転移の認められる末期の肝臓癌で、後半年もたないと医師に言われた主人は、奈落の底に突き落とされた思いだったと後で述懐しています。それから1カ月は検査に明け暮れ、最終的に肝臓にできている腫瘍は癌ではなく、血管腫が巨大になったものだろうとの診断が下され、手術のために国立宮崎医科大学の付属病院に移りました。

巨大になった血管腫はすでに背中を

通る大静脈もつぶして、手術の成功率は20パーセントぐらいと、まさに死のふちに追いつめられた思いでした。ほんの数日前までは健康だけが取り柄と豪語していた私。プールで遊んだ2日後には明日をも知れぬ重病人です。文字どおり晴天のへきれきでした。トイレの中やちょっとしたすきを見つけては、人目を忍んで泣きながら祈っていました。3歳と4歳の子供と愛する夫、家族にはまだ私が必要です。どうぞ召してしまわないでください。再び家族のもとに帰してください。絶叫に近い祈りでした。鈍くなっていた霊が涙で洗われ、光を取り戻し始めているのを感じました。死と向き合った時、頼りすがれるものは神しかないのだと体が悟ったのです。モルモン経をむさぼるように読みました。襲い来る不安に眠れぬ夜はモルモン経を抱き締め、祈りの言葉を繰り返し、心を静めました。教会の兄弟姉妹の信仰ある励ましや祈りが、ともすれば絶望に陥りそうな気持ちを救ってくれました。自分が福音を知り、教会というひとつの大きな「家族」の一員である祝福を、これほど強く感じたことはありませんでした。

手術の4日ほど前、急にホワッと心に平安が訪れました。何か温かいものに包まれたような穏やかな平安は、手術が近づくにつれ増していきました。祈りが聞き届けられ、主が共にいてくださるのを強く感じました。食欲も出、夜もぐっすり眠れるようになりました。手術の前日、回診に来られた先生方がそんな私を見て「おっ、随分元気そうだな。これはもしかしてうまくいくかもしれない」と話しておられました。もしかしてという言葉が引っかけりましたが、絶対に大丈夫だという確信は揺るぎないものになっていきました。

手術の日、多くの人々が祈ってくださいました。輸血の準備のため、たくさんの人々が駆けつけてくださいまし

た。母がしみじみ後で述べました。「教会の人たちって本当に兄弟、姉妹なんだね。」肉親の親兄弟にも劣らぬ愛を示してくださった多くの兄弟姉妹の愛ある働きに本当に感謝いたします。

手術は8時間、初めの予定どおりに終わりました。途中で静脈からの出血など緊張する場面もあったようですが、手術は成功したのです。

麻酔から覚めた私のまくら元に夫が泣きながら立っていました。「手術は成功したよ。よく頑張ったね。」夫の涙に、ああ、自分がまた、この現世で生きることを許されたのだと知りました。その喜びはたとえようもないものでした。主の愛と人々の愛を深く感じた一瞬でした。術後の経過は先生やスタッフの方々が「あきれほど」順調でした。手術前、主治医から術後はどんなに順調に回復しても6週間、まず2カ月はみていてくださいと言われていたのが、4週間目にはもう退院していいと言われました。肝臓の60パーセント以上を切除し、4,000ccの輸血をしながら、何の余病も併発せず、術後4日目から出された食事を平らげている私に、手術のスタッフの先生のひとりがしみじみと「あなたの肝臓は特別だよ。ぼくらの肝臓じゃ、こうはうまくいかないよ」と言われました。私の残されたわずかの肝臓は非常にきれいで、驚くほど丈夫だったのだそうです。これはきっと信仰ある人々の祈りと知恵の言葉を守っているせいだろうと、つくづく思いました。

8月3日に入院、ちょうど3カ月目の11月3日に無事退院。私にむしゃぶりに泣いて泣くふたりの子供を抱き締めながら、再び生きて家族のもとに帰れた喜びに涙しました。私の入院中に奥さんを亡くされた兄弟が、見舞いの中でしみじみと言われた言葉があります。「人はだれでも一度は自分のゲツセマネを通らねばならないのですよ。」

信仰のやみに迷っていた時、主は私にひとつのゲツセマネを与えられました。そしてその苦しみを乗り越えた時、私は再び主の光を見いだしたのです。苦しみは私から多くのあかを取り除き、目の梁を落としてくれました。初めに祈っていたように証がよみがえり、み

たまを再び頻繁に感じるようになり、主が確かに生きておられることを実感しました。現世は私たちが主と会うために備える場です。試練はいつもいろいろな形で訪れますが、それは自分を



永吉ご家族

さらに清めるために主が与えてくださった機会と信じて、一つ一つ乗り越えていきたいと思っています。また、私の入院、手術に際し、多くの方々の励ましや助けがあったことに心から感謝しています。奉仕をいかにすべきかを教えてくださった多くの方々に感謝いたします。ありがとうございました。

福音は愛。ゲツセマネを通して私の得た答えでした。(ながよし・あつこ 日曜学校教師)

すばらしい人生



東京ステーキ部
吉祥寺ワード部
酒井洋子

3歳の時に両親が離婚して、物心がついた時、私は父と新しい母と暮らしていました。そこに弟が生まれて、4人家族になりました。父はアルコール中毒で仕事に行かないことが多く、継母がパートで働いて生計を立てていました。小さな弟の世話は私の役目だったので、友達と遊ぶ時間はあまりありませんでした。私は家が嫌いでした。本が好きだったのでいろいろなお話を読みましたが、かわいそうな

孤児の話は私にはうらやましい話でした。孤児なら少なくとも、アルコール中毒の父親と同じ家に住むことはないからです。

中学2年の時に、酔った父と珍しくもない大げんかをしたのを機に、私はときどき会いに来てくれていた実母のところに行き、それから二度と父の家には戻りませんでした。名字も変わって母と親子ふたりの暮らしが始まり、やっと心が平和になりました。

私は社会人になり、ひとり暮らしをするようになりましたが、それでも心の奥でいつも思い続けていました。「私が自分で選んでしたことのためになら、どんなに苦しくても頑張っていける。でも、自分で選んでいないことで苦しむのは納得がいかない」と。それは両親への恨み言でした。子供のころ苦しかった思い出がどうにも悔しく

て、「生まれたくて生まれてきたんじゃない。こんな家とわかっていたら生まれてきたくなかった」と日記に書いたこともあり。親身になってくれそうな人がいると、「あんなにつらい目に遭ったのは、私が悪い子供だったからじゃない!」と泣きわめくように言って、相手を当惑させたこともあり。ました。

でも昨年秋に改宗し、今、教会で得ている知識が心を和ませてくれます。前世でも自由意志を持っていたという知識が、今まで感じていた不条理をすべて説明してくれるのです。すると恨む気持ちがなくなりました。

「本当につらかったのです、神様。でも私は、生まれたいと思って生まれてきたんですね。つらい思いをすることも知っていて、それでも試しを受けるために、そして合格してまた神様と一緒に住めるように、私は生まれることを望んだのです。ああ、よかった。それが知りたかったんです。これできちんと生きていけます。何が正しくて、何が間違っているか、落ち着いて考えることができます。幸せな子供時代を持つ人を、胸が痛くなるほどうらやむ気持ちもなくなります。苦労知らずでだれからも愛される人を、ねたむ気持ちもなくなります。神様の愛が降り注

がれるのを感じられるから、私はもう大丈夫です。」

何週間か前、ある兄弟が、人生というのはその人にとって最高に美しいもので、感動して涙が出るくらいびったりの瞬間に生まれて、死んでいくんだと教えてくれました。

2、3日前の夜、教会から歩いて帰る道すがら、ふと、私の人生はいいな、と思いました。美しいな、と。まだ途中だけれど、これが私に与えられた人生か、と思ったら、うれしかったんです。一日一日が、すばらしい賜だということに、気がついたのです。(さかい・ようこ ステーキ部宣教師)

ワード部/支部特集18

岡山ステーキ部福山支部



主は導いて くださいます

支部長
中野哲理

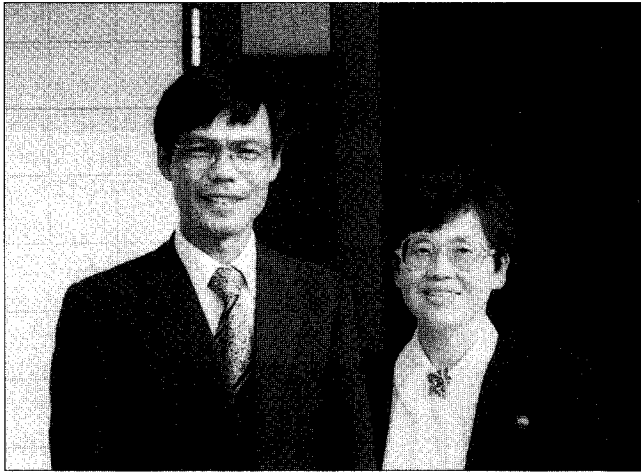
もともと私は過ぎ去ったことは悔やまず、新しいことに取り組んでいく性格でした。教会員としての生活を続けていくうえで、この性格は大きな助けとなりました。しかしそれでも、折に触れて与えられた、神の導きや励ましがなければ、ここまで証を育て、信仰を養い、責任を果たしてくる

ことはできませんでした。小さな証の積み重ねによって今の私があると言えるでしょう。

およそ20年前、大学生だった私は心の中で何かをしきりに求めていました。学校は面白いと感じず、勉強よりもむしろ運動に没頭し、一方では種々の書物を読んでいました。そんなある日、街頭で1枚のちらしをもらい、そのちらしを頼りに教会へ足を運びました。最初から英会話だけではなく、安息日の集会にもすべて出席しました。初めのうち、どの集会に出席してもあまり心に響くことはなく、自分が求めているものとは少し違うな、という気さえていました。ところが福音を学ぶ

ちに少しずつ心の中に変化が生じてきました。だんだんと心にぴったりと取まってくるような気がするのです。しかも主は、私が知恵の言葉を苦労しないで守れるように準備してくださっていました。当時私は運動部に入っていたので、運動の差し障りにならないよう、一時吸っていたたばこをやめました。またアルコール類も体調を崩したためかどうか、まったく体の方が受け付けなくなってしまいました。これが教会を知る数カ月前のことです。2、3カ月福音を学び、バプテスマを受けました。12月25日、雪のちらつく寒い日でした。

次の年の4月に学生生活を終え愛知



中野ご夫妻

県豊橋市へ行き、2年余り働き資金をため、伝道に出ました。任地である日本東部伝道部は、私の伝道中に札幌伝道部と仙台伝道部に分割され、私は仙台で、現在の東京神殿神殿長であるウォルター・繁雄・照屋伝道部長のもとで、伝道を続けました。

1976年4月には専任宣教師の務めを終え、故郷の岡山県笠岡市に帰り、養鶏の仕事に就きました。所属の教会は、約25キロ離れた所にある倉敷支部です。ここには1990年9月まで集いましたが、その間に、岡山は地方部からステーキ部になり、倉敷ワード部には新しい教会堂が建築されました。

ある日、私にとってはあまりにも突然の支部長の召しにより、福山支部へ集うことになりました。それから10か月、今度は福山支部の教会堂の献堂式を迎えました。なぜ家や職場から遠くなるこの地へ来ることになり、しかもこの責任に召されたのだろうか。何度もこの疑問を繰り返し考えてきました。しかしここ福山で、倉敷ワード部に続いて2度目の教会堂の献堂に立ち会う祝福にあずかっています。おそらく、私たちが教会堂を建てるために払った犠牲よりも大きな祝福を受けているのではないのでしょうか。この祝福を受けている私たちは、さらに謙遜になり、悔い改めをし、感謝の気持ちを強めなければ、という思いがわいてきます。会員たちの示した信仰、愛、一致、赦しなどをさらに増し、隣人へと伝えていかなければと思います。主は確かに私たちを愛し、導いてくださっていることを証します。(なかの・てつり)

教会堂完成によせて

原田秀吉

福山支部の教会堂が完成したのは1991年6月13日です。ここまで到達するには長い時間がかかったように思います。

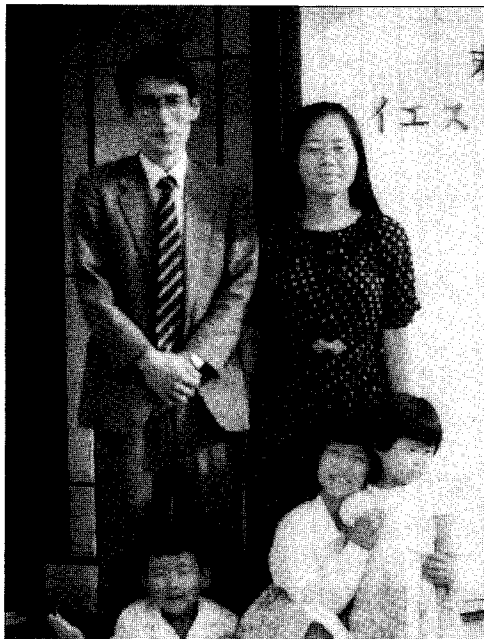
福山支部は1979年10月28日に広島東支部の付属支部より独立しました。それ以来、^{せいさいさん}聖餐会平均出席者数は40人前後で、約10年同じような状態が続きました。そのような中、教会堂建築のための用地が1984年12月に与えられました。教会堂建築のチャレンジを受けたのは1988年の終わりごろでした。聖餐会平均出席者数が四半期で60人以上を達成すれば建築の許可が下りるのです。水田支部長をはじめ神権役員はこのチャレンジが手に届かぬものでないと決意し、この機会にぜひとも教会堂を得なければ借り物の証のままになってしまうと意識を変えました。

1989年1月から3月の第1四半期、このチャレンジにこたえて、主に誓約した安息日は教会に集うという決意と、家族や近所の人々を誘うという会員伝道の決意を強めました。また英会話の参加者が安息日の集会に来れるよう働きかけがなされました。この時期、会員の働きによって、両親や親戚、近所の友達など多くの人が教会の集会にきました。そういった求道者の数は30人を超えるほどになりました。

このころ私の次女に、子供の命名と祝福の儀式をする日がありました。その日は聖餐会の出席者数が80人以上を数え、礼拝堂の中は人でいっぱいでした。私は足ががくがくするほど緊張していましたが、神様の助けによって支えられ祝福を行なうことができました。次女の名は結実子。この子の名前のように目標が達成され、実を結ぶことができるようにと願いを込めて付けたものです。その日多くの人々が聖餐会に集うのを見ながら、まるで奇跡のようだと思えました。こんなにたくさんの方が集うとは夢にも思いませんでした。また、私の父親を初めて教会に連れてくることができたのも、この時期でした。毎週のように家族や親戚を招待した会員もおり、すばらしい思いに満たされた時期でした。

その四半期、目標は達成しましたがその状態は長くは続かず、翌年の第1四半期に再び同じチャレンジに取り組むことになりました。しかし今回は前ほどに力が出ず、出席者数はなかなか増えません。ステーキ部の指導者の「今チャレンジにこたえていかなければ、いつまでたっても教会堂は建ちません」という言葉が胸に残りましたが、私は半ばあきらめの境地に入っていました。しかしこの年、神様の忍耐といつくしみとによって、たくさんの方々の活発な転入者を迎え、目標は再び達成されました。

1990年12月24日、クリスマスイブに^{くわい}鍬入れ式が行なわれました。神様からのプレゼントである教会堂は、福山で伝道が始まって20年になる昨年に完成しました。8月4日午後3時半より、当時アジア地域会長会第一副会長であったW・ユージン・ハンセン長老を迎えて献堂式が行なわれました。ハンセン長老から次の点について話がありました。1991年は日本で伝道が始まって90年になる歴史的な年であり、その間教会がどのように発展していったか。ハンセン長老自身、9歳の時にヒーバー・J・グラント大管長の管理する献堂式に出席したこと。この献堂の日のことを忘れず、建物を築くだけでなく、心も続けて築いていき、手を差し伸べていくべきであること。犠牲は天より



原田ご家族

の祝福をもたらすことを覚え、善き業に時間を用いるようにという勧告などです。

私は、献堂の祈りの^{きき}捧げられるのを聞き、これから福山支部に、またこの備後の地域に主のみ業が推し進められ、シオンが確立され、人々の心の中にも築かれること、そしてさらにシオンのステーキ部が強まり、その教会は広がっていくと確信しました。人は努めて最善を尽くす時に私たちの手の届かないと思えるところにも神様のみ恵みを得て、到達できることを証いたします。やればできるし、またその努力は無意味なものにならず神様の祝福がもたらされると証いたします。(はらだ・ひでよし 支部書記)

チャレンジに こたえる

水田正

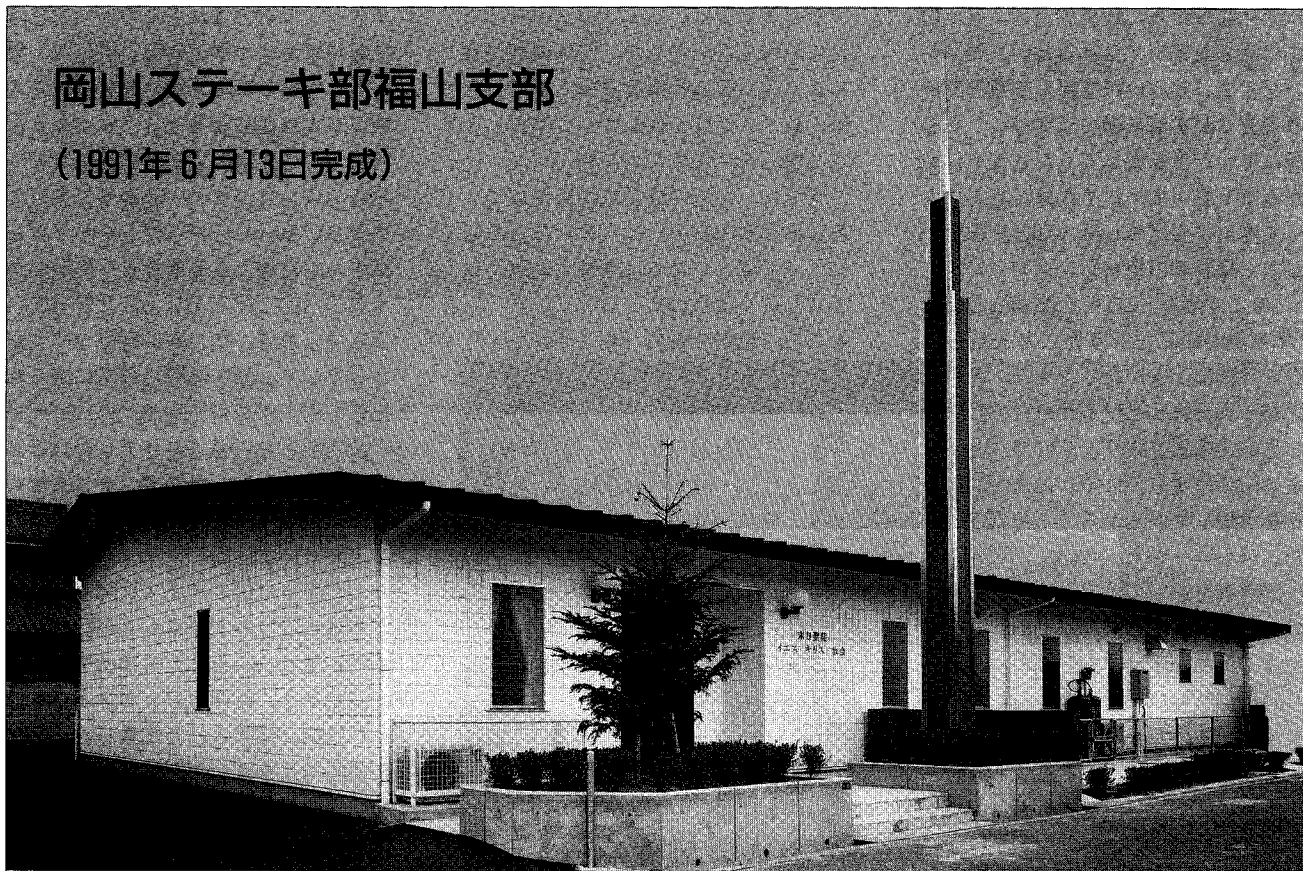
昨年8月、当時アジア地域会長会第一副会長のW・ユージン・ハンセン長老の祈りにより、福山支部の新しい教会堂が献堂されました。会員たちにとって長年の努力が報われ、夢がかなえられたすばらしい感動の日でした。

私が初めて福山支部の集会に出席したのは、東京から就職のため妻とふたりの子供と共に福山市郊外に移り住んだ1976年4月、約16年前のことです。古い民家で十数人の会員と宣教師たちが

新教会堂の紹介

岡山ステーキ部福山支部

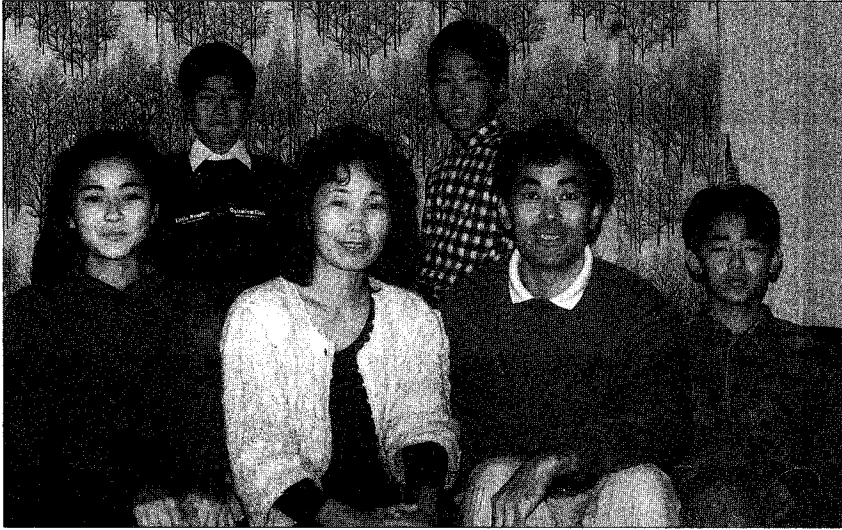
(1991年6月13日完成)



木造平家建
建築面積：285.00 m²

延床面積：283.12 m²
敷地面積：760.34 m²

所在地：広島県福山市沖野上町5丁目4-20
☎0849-25-0258



水田ご家族

家族的な雰囲気の中で集っていました。

1988年まで、聖餐会の出席者数は40人前後が長年続いていました。教会堂の建築申請には60人以上の出席者数が必要でした。1988年11月に福山支部は特別のチャレンジを受けました。1989年の第1四半期の平均出席者数が60人以上になったら、建築予定ユニットの中にリストアップされるというチャレンジです。これは伝道部長や建築関係者の方々が本当に福山支部のことを心配してくださり愛してくださっていたからだと思います。それは私たちにとって本当に素晴らしい、喜びで飛び上がらばかりのチャレンジでした。

「そこで私ニーファイは、私の父に『私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである』と言った。」(Iニーファイ3：7)

指導者を通して主よりのたまわったこのチャレンジにこたえるため、当時支部長であった私は聖餐会でこの素晴らしい祝福と喜びを会員に発表し、全会員の協力と一致をお願いしました。1カ月で40人から60人にすることはだれにも不可能に感じられました。しかし、私はニーファイの言葉と信仰に励まされて、全力を尽くせば後は主が助けてくださると主に信頼して働こうと決心しました。

月2、3回休まれる会員がちょうど20人程度おられましたので、彼らに働きかけて安息日を100パーセント守っていただければ60人出席も夢ではありませんでした。しかし、四半期も半分過ぎた2月中ごろで平均出席者数は50人を切っていました。

そのままでは、チャレンジ達成は非常に困難な状況でした。支部の神権会にステーキ部の指導者を交えて話し合い、祈りと信仰を強く持って努力しようとの決心を新たにしました。

今度は、数人の会員に面接をして、自分の家族や友人、知人に祈りと信仰によって働きかけて、聖餐会に出席していただくようにチャレンジしましたところ、忠実な会員たちはそれを実行し、その後出席者数は80、90と、100人近くまで増加しました。最終的には3カ月平均が66人となり、多くの会員、指導者、宣教師たちの祈りと信仰により主の助けを受けて、チャレンジを達成できました。

「何ごとにも汝らが為されんと信じ信仰堅固にわが名によりて御父に乞い求むることは、それが正しき限り汝らに為さるべし。」(モロナイ7：26)

モルモン経はまことに生きた神のみ言葉です。そのみ言葉は現代の私たちのために書かれたものです。ジョセフ・スミスは神の予言者でした。現代の生ける予言者エズラ・タフト・ベンソン大管長は神の代弁者です。(みずた・ただし 伝道主任)

カーセージでの経験

水田和代

バプテスマを受けて21年になりませんが、福音を学ぶにつれ、ジョセフ・スミスに対する敬愛の念が増してきました。いつか教会歴史にまつわる地を訪れてみたいという気持ちが強くなっていった昨年の春、恵まれてその旅が実現しました。パルマイラ、ノーヴー、アダム・オンダイ・アーマン、インデペンデンス、ソルトレークシティと各所で素晴らしい経験をさせていただきました。特にカーセージの牢獄での経験は、私たちにとって、生涯忘れることはできないものでしょう。

アイオワ州バーリントン空港から1時間ぐらい車で走った所に、ノーヴーという穏やかで美しい小さな田舎町がありました。モルモンの聖徒たちは、ミズーリで迫害されてこの地に逃れ、主から示された都市計画に従って、整えられた美しい町を築きました。この地にも大きな訪問者センターがあり、何組ものご夫婦の宣教師の方が働いておられました。その中のあるご夫妻が、私たちがカーセージへ行くつもりだと話すと、自分たちもそちらへ用事があるから一緒に行きましようと言って、ご自分の車で、私たちに同行してくださいました。姉妹は町に用事に出られ、兄弟と主人と私の3人で、カーセージの訪問者センターに入りました。ほかに訪問者がなかったの、そこで働いておられる宣教師の方が、中を案内してくださいました。

まずジョセフ・スミスに関するビデオを見せていただきましたが、とても感動しました。そして各部屋を案内してください、最後にジョセフとハイラムが暴徒に襲撃されて殉教した、2階の部屋に入りました。ドアは当時のままのもので、撃ち込まれた銃弾で、穴が開いたまま保存されていました。案内の姉妹の説明を聞きながら、私たち全員胸に熱いものを感じていました。ジョン・テイラーがジョセフに頼まれ

て歌った『悩める旅人』(賛美歌15番)のテープが流れ出したころには、私はこらえきれないで泣いていました。その場の特別なみたまを全員が感じました。そしてジョセフ・スミスを愛しており、ジョセフ・スミスの回復した福音によって自分の家族は幸福だと、次々に証されました。私もまったく同じ気持ちでした。確かにジョセフ・スミスは命をかけてこの福音を回復し、自らの血をもって証を結び固めたという確信を得ることができました。この経験は、これからの信仰生活の支えになるでしょう。

この旅行で、私たちは訪れたすべての地でみたまを感じ、そこで働いておられる年輩の宣教師の方々の中に、その霊性とすばらしい人格と愛を見ました。私たちもあのように幸福に年を取っていったらと、希望が与えられました。主人とふたりで、地図を片手に、目的地を探しながらの初めてのアメリカ旅行でしたけれど、主のみ手をいつも感じていました。私たちがはぐくんできた証を、再確認する旅でした。

この教会はジョセフ・スミスによって回復され、確かにイエス・キリスト様が導いていらっしゃる教会です。そして、モルモン経は、ジョセフ・スミスによって翻訳された神のみ言葉です。また、エズラ・タフト・ベンソン大管長は、神から召された予言者です。これは私の心からの証です。決して否定することはできません。私たちには、もったいないほどの主からのプレゼントに心から感謝しています。(みずた・かずよ 支部初等協会会長兼第二副会長)

愛を受けて 再び教会へ

見世田富子

「神様に会ったことがあるのですか?」「神様を信じているのなら、神様はどんな方か教えてください。」「天はどこにあるのですか?」何も答えられない私に「そんなのはその信仰だ」と厳しい友人の言葉。ますます自分の信仰に対して自信をなくしてしまいました。

信仰とは何だろう、証って何だろう。19歳でバプテスマを受けて、いろいろな責任を受けて表面上だけは教会に行っても、心の中は何もわからないままでした。当然のように信仰生活よりも教会外の生活が魅力的になり、「私は二度と教会員としての生活をすることはないだろう」と思い、教会員でない人と結婚をしました。そして結婚を機に広島から福山に移ってきました。

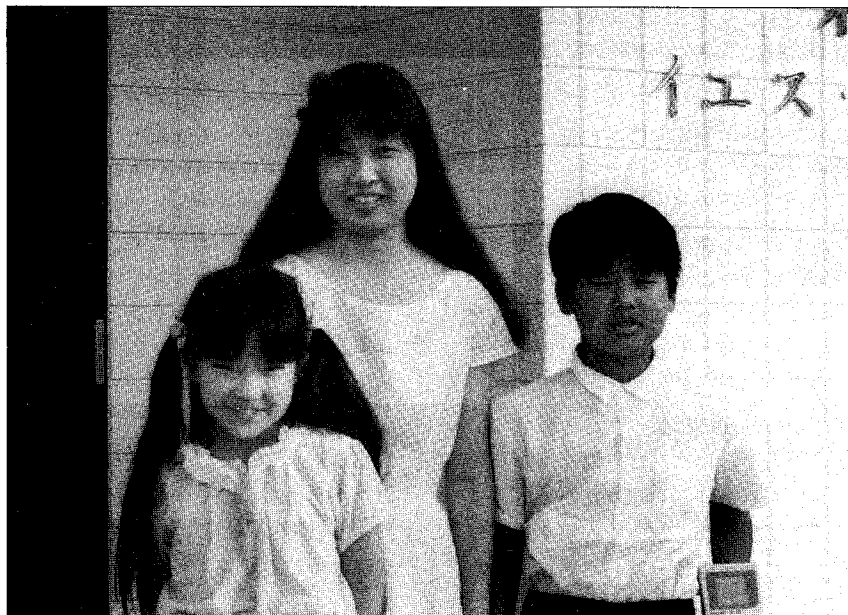
教会のこともすっかり忘れたころ、広島の人を通して、福山の教会の方が私を訪ねてくださいました。でも教会に行く気持ちなどなく、ただ断わりきれないため仕方なく訪問を受けている状態でした。でも訪問教師の方は、よく忍耐して訪問してください、次第に、子供のことについてお話ししたり

するようになり、福山に来て友人の少なかった私にはうれしいことでした。

ある日、私の訪問教師であり、扶助協会の会長であった姉妹から「扶助協会の母親教育の教師をしてくださいませんか」とお話を受けました。それまで教会に出席したこともなく、教会に行こうなどとも思っていなかった私には本当にびっくりするようなお話でした。姉妹の帰られた後も、なぜ? なぜ私に……? 不思議でそればかり考えていました。たくさんの罪を犯している私になぜ? と思ったとき「神様はまだ私を覚えておられる、こんな罪深い私なのにまだ愛してくださっている」という思いがいっぱいになり心の中が熱くなってきました。

すぐ2階に上がって、モルモン経を開いてみました。でも私の胸の中は「神様は私をまだ愛してくださっている」という気持ちがいっぱい、涙があふれ、モルモン経を読むことはできませんでした。「教会に行きたい!」教会を離れて6年、長男が3歳、長女が1歳になっていました。

「せめて月に1度だけでも教会に出席し、責任を果たすことができますように」とお祈りをし、主の助けを得て、教会に再び集い始めました。そうするうちに欲ばりなもので、「月に2度」「せめて日曜日だけでも毎週」と祈るようになってきました。でも主は確かに祈りを聞いてくださって、ほどなく



見世田ご家族

して私は子供たちと毎週教会に出席することができるようになりました。

ある日、モルモン経を読んでいてすばらしい聖句を見つけました。「信仰とはまだ見ない物事を望むことである。」(イテル12:6)若い時に「神様はどんな方ですか、会ったこともないのにどうして信じているのですか」と言われ何も答えられなかったけれど、何もわからないまま、がむしゃらに信じていたことは、決して間違っていないのだと、この時初めて自分の信仰に少し自信が持てました。不思議です。私の求めていた聖句は12年かかってようやく見つけれられたのです。

「すべてのことは、その時節^{じまつ}に至りて成らざるべからず。」(教義と聖約64:32)今、バプテスマを受けて21年になりました。そして昨年7月には長男

が12歳になり神権を受けることができました。

長男の^{せいさん}聖餐のパスをする姿を見て涙を流してくださる方。ひとりで座っているとそっと隣に座ってくださる方。証をした長男の頭を黙ってなでてくださいる方。子供たちを愛してくださる若い兄弟姉妹。教会員ではない主人をいつも愛して声をかけてくださる方。多くの兄弟姉妹の助けがあつてここまで乗り越えてこられましたことを心から感謝しております。私はまだ天のお父様にもイエス様にもお会いしたことがありません。でも確かにおふたりが生きておられ、私たちを愛して導いてくださっていることを知っています。(みせだ・とみこ 支部若い女性会長 会会長)

アロン神権を受けて

見世田圭映

ぼくは、去年の7月24日で12歳になりました。次の日が神殿参入のため、誕生日の夜、アロン神権をうけに教会に行きました。神権をほどこしてくれる支部長さんの手から、何かわからないけど気持ちのいいものがゾクゾクと体の中に入ってきて、神権をうけてよかったと思いました。家ぞくの中でたったひとりの神権者としてこれからがんばります。(みせだ・よしてる)

家族の証

新たな私の旅立ち

町田ステーキ部湘南ワード部
穴澤あさ子

初めて聖典のひとつである聖書に巡り会いましたのは、1974年の秋のことでした。仏教の中で生まれ育ちましたので、キリスト教にはまったく縁のない生活を送っておりました。ですから最初に会ったある教会の伝道者の方の言葉に、ただ驚くばかりでした。もっと詳しく知りたいと思いませんかと誘われ、勉強の約束をしておりました。その時一番心に感じたのは、「人は死んでもまた復活して永

遠に生きられること」と、「この世からすべての苦しみや病気がなくなり、平和な生活が送れるようになること」などで、これらに非常に気持ちが引かれました。なぜなら私^{わたし}がその当時、一番心から望んでいた状況だったからです。そのころは精神的にも経済的にも苦しい日々が続いており、何かにすがりたいような気持ちでした。けれども神がすべての苦しみを取り除いてくださり、平安を約束しておられることが、その教会で勉強を続けていくうちにわかってくる、希望に満たされるようになりました。

しかし、知識としては何度も教えていただきましたので十分理解できるようになりましたが、自分自身の苦しい状況は少しも改善されません。そのうえみたまを感じることもなく、本当に

つらい思いをいたしました。なんとか改善したいとその教会の皆様^{みなさま}に援助を求めましたが、納得のいく答えは与えられませんでした。苦しくて、泣きながらよく神に祈ったのを思い出します。

7年ほどそこにおりましたが、もうこの場所には神はいない、離れるしかない、失望を感じた何人かの人たちと共に私は決心をしました。背教者として私たちは追い出されましたが、皆悲しんではおりませんでした。

新たな決意のもとに再び集まり学ぶこととなりました。リーダーとなった方の家で毎週集い、聖書を学びました。リーダーは、聖書を説き明かして下さり、私たちに教え、これからの世の中の出来事に対していろいろと準備すべき事柄などを指示していただきました。弱い者、貧しい者、そして自分た

ちの霊的、物質的な必要を満たすために十分な備えをするように言われ、学びながら商売をすることになったのです。

初めは、私たちも何の疑いもなく信じて真剣に取り組み働きました。しかし時は人を変えてしまうのでしょうか。2年、3年と過ぎるうちにリーダーの方に変化が見え始めて教祖的な存在となり、着飾ることに夢中になったために大変な費用が必要となってきてのです。私たちには、働きが足りないと感じて厳しく当たるようになってしまい、またもや私は失望せねばなりませんでした。「私の言葉は神の言葉である」と言われては口答えひとつできず、その時はじっと耐えるしかありませんでした。神の愛を学びながら、なぜこうなのかと悲しい日が続きましたが、ある日突然その機会が訪れまして別れの日がやってまいりました。

モルモン経に巡り会ったのは、それから2年ほど過ぎたころでした。私と同じく初めの教会を離れて行動を共にしていた女性が、宣教師に会ってこの教会に改宗しました。私は彼女からモルモン経や教会について話を聞き、ぜひその教会に連れて行ってほしいとお願いしたのです。2年間ずっと、真実を教えてくださいと祈り求めてまいりました。今の私の気持ちは、迷子になった子供がやっと親を捜し当てた時の喜びと安堵の気持ちに似ております。

長い回り道をしてまいりました。つらくて死を考えた時もありました。福音を知った喜びの反面、自分が夢中になったあまり夫や子供たちに寂しい思いをさせ、大変な迷惑をかけてしまったことに心が痛みます。人は正しい導きがなければ、大変な間違いと苦しみを味わうものだということもよくわかりました。

1990年6月10日、初めて宣教師に会ってからおよそ2週間後にレッスンを終えて、バプテスマを受けました。以来、「家族を大切にするように」という教えに従って、今までおろそかにしてきたことですが、心からの愛を主人や娘たちに示すよう努力してまいりました。十分にはまだできません。しか



穴澤あさ子姉妹(中央)と優子姉妹(左)と妹の順子姉妹

し家の中が少しずつ変化してきましたのは事実です。娘たちも改宗してからは大変明るくなり楽しく教会に集っております。

私はこの教会に改宗して真実の愛を教えてくださいました。親切に導いてくださいました宣教師の皆様と兄弟姉妹の皆様感謝いたします。そして、いたらない私を見守り、この教会まで導いてくださった神様の愛を強く感じることができて心より感謝しております。(あなざわ・あさこ ワード部扶助協会書記兼会計係)

強い力に 導かれて

町田ステーキ部湘南ワード部
穴澤優子

妹と私がこの教会に入ったきっかけは、母が姉妹宣教師を自宅に招いたことから始まりました。そして成り行きで福音を学ぶことになったのです。以前別の教会へ加わっていたこともありましたが、少なからず宗教について興味があったものの、最初はあまり気が進みませんでした。しかし回を重ねていくうちに、彼女たちが教えてくださいました福音にどんどんと引き込まれていきました。

一番魅せられたことは「私たちは生

まれる前にどこにいたか」ということです。以前から私が最も知りたいことでした。姉妹宣教師は丁寧にわかりやすく教えてくださいました。

そして1991年1月のある日曜日に教会へ行くことになり、先に改宗した母に連れられて向かいました。教会のビルの入り口でも教会員の方々に温かく歓迎されました。私が教会へ行って、初めて感じたことは、この教会の人々の表情が明るくいつも笑顔浮かべているということでした。以前入っていた教会では皆の表情は暗く教会員同士でいがみ合っていたのです。私も今のこの教会の人々のように明るくなるだろうか。そう思いました。

何度も教会へ行くうちに私の中にあつた不安も薄らいでいくようでした。そして私と妹はバプテスマを受ける決心をしました。姉妹宣教師と出会ってから2カ月、少し早過ぎるのではとも思いました。しかし結果的には良かったと思います。もしもあと数カ月、バプテスマを受けることを延ばしていたら、様々な誘惑に負け、この教会には入っていなかったかもしれません。今まで母にこの教会の話をお聞きされても何の興味もなかった私たちも、何か目に見えない強い力に導かれたように改宗することができました。真の回復された福音と、それに接する機会を与えてくれた母や、丁寧に教えてくださいましたふたりの姉妹宣教師に心から感謝しています。(あなざわ・ゆうこ ワード部若い女性会長会第二副会長)

8月に召された 専任宣教師

第158期生 13人



後列左から1-8, 前列左から9-13

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 池 畠 丸 民	福岡M/鹿児島D/鹿児島B	東京南伝道部
2. 染 谷 敏 子	東京東S/水戸W	福岡伝道部
3. 松 井 あ や か	名古屋M/富山D/富山B	大阪伝道部
4. 佐 々 木 京 子	町田S/湘南W	大阪伝道部
5. 常 盤 智 佳 子	静岡S/富士W	札幌伝道部
6. 村 上 由 香	福岡M/熊本D/八代B	東京南伝道部
7. 井 上 寿 美	名古屋S/豊田B	岡山伝道部
8. 上 野 ひ ろ み	仙台S/泉W	岡山伝道部
9. 當 真 健 一	BYU 11th S/Asian W	札幌伝道部
10. 甲 斐 英 樹	福岡M/鹿児島D/宮崎B	神戸伝道部
11. 松 館 三 吉	仙台M/青森D/八戸B	東京南伝道部
12. 宮 本 多 喜 夫	岡山S/倉吉B	札幌伝道部
13. 長 門 宏 明	札幌西S/小樽W	東京南伝道部

S:ステーキ部, M:伝道部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

お知らせ

役員の内命

1992年7月16日から7月30日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

- 東京東ステーキ部八千代ワード部
新監督:衛藤千代治
(前任者:小日向茂幸)

編集室から

皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本誌を読まれたの感想文などをお送りください。

▶現在ローカルページでは証の著者の生年を記載していませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名に併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先:〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話03(5489)9251
ファクシミリ03(5489)9254



息子アルマとモーサヤの息子たちの改宗(アルマ36：6，24参照) ゴットフリッド・クンツ画。

教会歴史美術館主催の第2回国際美術コンクール入賞作品。この3枚に及ぶパネル画には、息子アルマとモーサヤの息子たちの改宗が描かれている。

左側のパネルは「神の教会を亡ぼさう」(アルマ36：6)とする苦者たちを、中央は、天使が彼らに現われて悔い改めを叫ぶ場面を、

右側は、彼らがイエス・キリストの福音を宣べ伝えているところを、それぞれ描写している。



サ デ・メッツァタハティ姉妹とサリア・カルフネン姉妹の美しいコーラスは、フィンランドの聖徒たちの間にある一致を物語る。世界のほかの地域ほど長足の進歩を示してはいないものの、献身をもって知られるこの国の会員同士のきずな、フェローシップによる結びつきは、容易には切れない。(本誌「この歌を聞いてください」p. 8, 「スオミ——フィンランド バルト海の灯台」p. 12参照)